

に師事した親和も、矢張り其の氣風の感化を受けてが、其の射術と書と共に、負けじ魂も有名であつた。

親和は、特に篆書に巧みであつた。當時親和染めと云つて、絹、縮緬、さては浴衣地にまでも應用されて、これを着ないものは、所謂時代遅れのやうに持て囃された。それは親和の書風の篆書を、それ等の横様に染めぬいたものだつた。それがために、女子供に至るまで、親和の名を知らぬものはなかつた。また射術では、書よりも更らによく知られてゐた。三十三間堂の通じ矢などで、屢々人を驚かして居た。

二 樂師を觀音に鑄直し

「先生、お在宅でございますか。」「いや、これは御町内の方、お揃ひで、ようこそ。

何が御用かな。」

今日しも町内の重立つた者が打ち連れて、三十三間堂に掲げる扁額の書を頼むべくやつて來たのだつた。

「實は先生、今日はお願ひがあつて、かうして町内のものが揃つて參りました。他でもございませぬが、先生も兼ねて御承知の三十三間堂の事につきまして……。」
 「ほう、三十三間堂がどうか致したかな。」「實はあの通り皆様のお骨折りで、立派に出來致しましたが、お堂にかける額でございまして。」「成るほど……。」「これは市中の者から寄進を致さうといふ事になりました。最う出來上つて居りますが、其の額の文字でござります。」「ははア、それを俺に書けと言はつしやるのかな。」「へい、お察しの通りで、弓術御名譽の先生には、殊に御縁も深うございますから、是

非とも一つお願い致したいものでございまして……。「いや、然う言はれると赤面の至りぢや。世には能筆家は幾らもある中に、特に俺にといふお志が忝くない。俺としては此の上の名譽はござらぬ。宜しい、書きませう。」「早速御承知下さいまして、私共も斯うしてお願ひに参つて面目でござります。皆さん、先生がお書き下さるといふ事、まア御安心なさい。」「先生どうも有り難ふございます。」「誠にどうも、先生有り難ふ。」と、町内のものも口を揃へて禮を述べた。

それではと云ふので、出来てゐた額を親和の家へ運び込んだ。親和はそれを見て、

「扱て、何を書きませうかな。」「左様でござりますね。三十三間堂の事でござりまするから、ただ三十三間堂でよろしかござりませんか。」「唯だ三十三間堂？」

ふむ、それでは何だか智慧がないやうでござるな。「では何とでも、先生の宜しいやうにお認め下さいまし。」「左様か、では考へて見ませう。」

其れから親和は「圓通」と達筆を扱つた。此の圓通の二字は、三十三間堂が以前淺草にあつた時分の額で、筆者は土屋相模守。相模守は其の頃の能筆家、それに和漢の學に秀でて居つた。親和が今「圓通」と認めたのは、即ちそれに倣つての事であつた。

扱て愈々此の額が三十三間堂に掲げられると、其の額面を仰いで、賞めぬものは一人もないといふ程有名になつた。

「さて、文盲の書きさまでにはござらぬか。」「は、は、これを知らずに掲げて置く別當も沙汰の限りぢや。」「左様。」と、此の額を仰いで、斯く罵り、大口開い

てカラノ、笑つた二人の律僧があつた。

人々が賞讃してゐるものを貶す。それは故意にか、或ひは笑ふべき事があつて笑ふのか、それを聞いた人々の口から耳へと、だんだんに擴がつた。

或る日の事であつた。さる物證の老人が、深川の親和を訪づれた。

「先生、御免下さい。」是れは能う御入來。何か御用かな。」

親和は老人を迎へてかう訊いた。

「へい、實はあの先生がお書きになりました、三十三間堂の扁額の文字の事でございまして……。」「ほう、あれが何とか致しましたかな。」「既に先生も御聞き及びでございませうが、何時だか二人の律僧が、悪口を申して行つたといふことを……。」
「否や、それは未だ承はらぬが、一體何と申したのでござらう。」「それでは、先生

は未だ御存じぢやございせんか、實は其の律僧が、「圓通」を書くのは可笑しいと言つて笑つたと云ふことでございます。仍で私も、いろくくと考へて見ましたが、漸く分りました。「なるほど……。」「あの「圓通」の文字は、以前の三十三間堂が、淺草にありました時分には、本尊は觀世音菩薩でござりましたから、「圓通」でよかつたのでござります。處が、今度の三十三間堂は藥師如來を安置されましたのですから、同じ文字では大きに違ふと申す事だらうと存じます。で、如何でございませう。一時も早く瑠璃殿とか何とかお書き直しになりましたは……。」

親和は礎と膝を打つた。

「なるほど、いや、律僧が嘲り笑ふたといふが無理もない事、俺は唯だ古事に倣ふて、あの二字を認めたのでござる。それも本尊を觀世菩薩と信じてゐたからぢや。

處が、その本尊の觀世音菩薩が、藥師如來に何時の間にか化けて居ようとは思ひもかけないことであつた。よく教へて下された。誠に赤面汗顔の至りでござる。此の儘知らずに打ち過したならば、未代まで恥をさらす處でござつた。いや、どうも忝けない。」

親和は老人に向つて、大いに感謝した。

「其の様に仰しやられますと、却つてどうも痛み入ります。では、お書き直しになりますか。」「いや、それはちよつとお待ち下さい。俺にはちと考へがござるし。」「お考へが、と仰しやると？」「固より此の儘には捨て置きませぬ。併し俺はこれまで一度認めたものを、書き直したといふ例はござらぬ。」「左様でございませう。でもこれだけはお書き直しになりませんと……。」「いや〜。俺はどんな事があつて

も書き直しはせぬ。それよりも、佛像の方を鑄直し申さう。」と、平然として言つたので、伴の物識老人も、呆れかへつて立ち歸つた。

親和は早速三十三間堂へ出かけて、別當の僧に事情を話し、幾らかの黄金を喜捨し、佛像改鑄の事を交渉した。別當の僧はあまりの事に、親和の顔を見つめてゐるので、暫しは聲も出なかつた。やがて我にかへつた別當も、豫ねて言ひ出したら何處までもそれを押し通さねば肯かぬ、親和の氣象をよく知つて居るので、快く承諾し、やがて鑄物師を呼んで、藥師の像へ澤山の手を鑄かけさせたので、藥師如來は一變して千手觀音となつた。

中には佛を玩具にしたといつて、親和の振舞ひを攻撃するものもあつたが、それは或る一部の人間で、世間の多くの人たちには、これがまた評判となつて、額見物

に出かけるといふ光景で、境内の賑やかさは又格別となつた。そしてさういふ人たちは、其の利かぬ氣こそ、親和の尊い處であると云ふのであつた。

親和は天明二年三月、八十三歳の高齡を保つて歿つた。墓は深川萬年町増林寺にある。

三十三間堂は、安政三年八月二十五日の暴風雨でめちやくくに叩き毀されたが、其のまゝとゞ復興されなかつたのは残念な事であつた。

士道軒榮山

一 佛像經典を賣つて酒色に耽る

京都東梅津の百姓、太作といふものゝ子に、政七と云ふものがあつた。政七は非常に強情で、そして我慢強かつた。我慢と強情にかけては、恐らく大人も敵はなかつた。そればかりでなく、才はちけて、辯の達者な、大人を凹ますやうな事は、決して珍らしい事ではなかつた。

親たちも、親戚のものも持て餘して了つた。

「どうだい。お前の處の政七は、あんな風ぢや末が案じやられる。寧そのことに今のうちに坊主にでもして了つたら、出世するかも知れないぞ。」と親戚のものに勧め

られ。

「なるほど、ほんにそれは善い事を教へて下された。」と、親達も其の氣になつて、梅尾の高山寺へ遣られて、頭を丸めて義定と呼ばれるやうになつたのは、政七が十二歳の時であつた。

政七は水呑百姓の子に過ぎなかつたが、其の性質は至つて伶俐で、一を教へれば十を悟るといふ風で、師僧も舌を巻いて驚くことは度々であつた。政七は早くも佛典に通じたが、其の他好んで史籍を涉獵して居たが、早くも其の才學は一山に高くなつた。二十歳の時に具戒を受けて、専ら修行を積む考へてゐた。ところが政七の多藝は却つて身に禍をした。それは、或る時戯むれに壬生狂言を演じたところが、同學に讒せられて、遂ひに寺を放逐されることになつた。

寺を逐はれた義定は、諸國を放浪した揚句、江戸に流れて来て護持院に入つて執事を勤めて居たが、熟々と當時の僧生活が厭でならなかつた。眞面目に袈裟や法衣を纏ふては居ても、其の裏面に入つて見ると、戒律などを守るものは殆んどなかつた。五代將軍の祈願所として、柳澤美濃守と、開山の僧隆光とが、一種の政略によつて建立されたと傳へられる護持院の風儀は、殊に甚しいのであつた。

「何だ馬鹿々々しい。戒律は極細だ、法衣は細細だ。何時までもこんな物に囚はれて、心にもない經文を讀んでゐるよりも、寧ろ自由氣儘な娑婆へ出て、仕度い儘放題に、面白可笑しく世を送つた方が、どの位罪が軽いか知れぬ。」と叫んだ。

斯く決心した義定は、佛像だらうと、經卷だらうと關はない。手當り次第に賣りとばして、酒色に耽つて、

「あゝこれで伸びりした哩。」と言つた。

二 口がある舌が動く

「おや／＼、どうしたんだらう。坊さんが死んでる。」「何、死んでるんぢやねえ、寝てるんぢやねえか。」「だつて、斯處處に寝るなんて、あッ、なるほど、生きてる／＼。動いてらア。」「破戒の乞食坊主に違えねえ。」「大方腹が減つて死にかけてるんだらう。」「可哀相だな。」「なに、可哀相な事があるもんか。破戒の罰だ。」と一人集り二人寄り、淺草觀世音境内の、大きな榎の木蔭に寝てる、穢くるしい一人の坊主の周圍には、眞黒な人集りとなつた。それは他でもなかつた。義定の榮山であつた。榮山はまつたく食に飢ゑて、もう一步も歩くことが出来なくなつて、其處へ倒れるとグウ／＼寝込んで居たのだつた。

ワイ／＼罵り騒ぐ聲に眼を覺した榮山は、

「黙つて寝てゐてさへこれだけの人が集る。うむ、然うが。瘦せ衰へても、俺にはまだ口がある。舌が動く……。」

斯う言つて見物人をギロリと見廻した。

「狂人坊主だ。」「氣が狂つてる。」と小聲で言つて逃げ出すものもあつた。

榮山はヨロ／＼と起き上つた。見物人はどつと逃げた。

「ば……馬鹿つ。」と罵りながら、何處ともなくふら／＼と歩き出した。

當時奥山の大公孫樹の下には、葎簧張の辻談義があつた。談義をする男は靈全と呼ぶ穢い坊主であつた。人々は此の坊主の事を「銀杏和尚」とも呼び、「よ／＼これ銀杏」とも稱名した。

「口がある。舌が動く。」と言つて起らあがつた榮山の眼には、其の辻談義の銀杏和尚坊主天窓が見えた。談義の聲が耳に入つたのだつた。

「舌一枚あれば、太平記を讀んでも其の日を過せぬ事は無い。俺は男子ぢや。こんな服装で餓え死んでなるものか。」と、忌々しげに榮山は叫んだ。

間もなく榮山は、何處で何う工面をして來たものか、三社權現の松の樹の蔭に高座を構へて、式ばかりの机には一巻の野史をのせ、道に志すといふ處から、「志道軒」と名乗つて、古本の史を説きはじめた。榮山は史には造詣が深かつた。殊に所謂名僧知識のなり損ねであるから、辨舌は爽やかだし、それに人々の好奇心を集めるために、如意の代りに八九寸もある様な木彫の松茸を構へて、机を叩いて拍子をとつた。身振り、假聲眞に迫るので、誰れでも足を留めて耳を傾けた。榮山が此處に現

はれてからは、「よごれ銀杏」の前には人影を見なくなつたので、遂ひに上野の方へ巢を替へた。山の人氣は榮山が一人で背負つて了つた。

三 嫌なものは坊主と女

榮山が説くところのものは、滑稽諧謔を旨として、なるべく俗受けのする様に努めた。それでも考證該博、武を語り文を説き、男女の情事を物語るものであるが、或ひは怒り、或ひは泣き、或ひは自ら抱腹絶倒するので、其の口にするところは一々眞に迫つて、一度足を留めたものは、容易に立ち去らうとはせなかつた。そして去る時には、必ず數錢を投げて行くので、意外の金が儲かつた。昨日まで餓ゑてゐた乞食坊主は、俄かに有福となつた。けれども金さへあれば飲み、食ひ、少しも身にはつかず、相變らず貧乏であつた。

榮山が一番嫌ひなものは、自ら愛想を盡かした僧侶であつた。それから恐るべきものは女だ。世上の態を見ても、また自分にも戒め難いものは女だと言つて、忌むことが著しかつた。坊主や女が立ち留つて耳を傾けると、直ぐに本筋を轉じて岐路に入つて、合の手に坊主や女を散々罵るので、後には坊主や女は一人も立ち停らなくなつた。

斯うして志道軒の評判が高くなると、一枚糞だの、今戸焼だのには勿論、祭禮の行燈、髮結床の障子、其の他あらゆる廣告にまでも、榮山の坊主天窗の似顔を畫いた。

志道軒榮山は、初め本所石原に住んでゐたが、其の後馬道に移轉して、居を無一堂と號して居た。そして片手間に「元なし草」といふ本を賣つたり、自像を板にして、

其の上へ茶化しびつた戯言を書いて賣つてゐたが、それがまた素晴しい人氣を呼んだ。彼の本草の學者として又戯作者として有名な風來山人の平賀源内が書いた「根なし草」は、榮山の「元なし草」の人氣にあやかると同時に、かう命名したのであつた。また源内は、榮山「風流志道軒傳」といふものを書いて、一つ世間の人氣を呼んでやらうと云ふ處から、それに筆を執つたが、黙つて出板する事も出来ないのので、其の許しを得んために、志道軒の弟子とまでなつた位である。尤も「風流志道軒傳」の内容は、源内の頭の中ででつち上げた空事計りであつたが、それがまた非常な賣れ行きであつた。初め「根なし草」を出板した時には、瞬くうちに三千餘部を賣り盡して、板元の上総屋利兵衛は、それがために莫大な利を得て、白壁町の小さな店から江戸橋四日市の廣小路へ移つて、上総屋の暖簾をかけて、立派に一簾の本屋にな

つたのを見ても、如何に此の辻講釋の志道軒のが當時持て囃されてゐたかが分る。また寶曆八年に死んだ市川栢延(二代目團十郎)と共に、江戸二名物と稱せられてゐた。

志道軒は明和二年三月七日、八十四歳を以て歿つたが、墓は淺草の地内金剛院にある。其の著述としては「元なし草」の外に、「五開論」と題するものもあり、また軍談或ひは敵討物語などを作つて、貸本屋に與へた事などもあつた。晩年には赤松子を學び、普ねく名山を遊歴し、傍ら導引の術にも技能であつたと傳へられてゐる。

僧 契 沖

一 菅神の靈夢

契沖、諱は空心、俗姓は下川氏、其の先は近江蒲生郡馬淵村に住し、祖父左衛門元宜は、加藤肥後守に仕へた。契沖の父善兵衛元全は尼崎侯に仕へたのだが、契沖は寛永十七年尼崎に於て生れた。其の漸く五歳の時、母の間氏が口づから百人一首を授けたところが、僅かの間に悉くそれを暗記した。また父は實語教を授けたが、それまた日ならず暗んじて了つた。

「此の子は只だの子ではない。」と、其の父母さんも驚き呆れるほどであつた。處が契沖は七歳の時、病を得て既に醫師さへも匙を投げて了つた。其の時契沖は自ら天

満天神の號百遍を書くこと三七日、一夜靈神を夢みた。其の靈神は、自分は管神の靈であるといつた。

「汝が至誠を感じて、病を除き命を延ぶ。他日僧となつて自ら務めよ。」と言つた。

ふと覺めて見ると、それは南柯の夢であつた。けれども契沖は、其の靈神の託言を堅く信じて居たが、それまで既に危まれたほどの病は、忽ち全快して了つた。彼はこれまつたく天神様の御利益である。あの時の託言の通り、僧侶になつて世に務めようと決心して、幼ながら父母に出家させて呉れと頼んだ。

「何を言ふのか。出家などといふのは、世を棄てたものゝなる事ぢや。」と父親が言へば母親もまた、殊の外おどろいて、

「まあお前は何を言ふぞえ、飛んでもないことを考へてお呉れでないよ。」と言つて

肯がなかつた。

彼は致し方なく、自ら腥葷を斷つて、常に佛號を稱へて居つた。父母も終ひには到底彼の志を奪ふことが出来ぬと考へたので、

「それ程出家がしたかつたら。」と云つて、今里の妙法寺手定密師の弟子とした。時に契沖は僅かに十一歳、世の常の子供ならば、遊びたい盛りの頃であつた。

手定は、彼の面をちよつと見たのみで、

「此の子なか／＼ものぢや哩。」と呟いた。そして、般若經を授けたが、讀む事僅かに五遍で、彼は既にそれを暗んじて了つた。そればかりでなく、一字違へず書くことも出来た。

契沖十三歳の時、落飾して高野山に登り、東寶院快賢に學び、後即ち寛文二年檀

越の請によつて、津の國生玉蔓茶羅院に住んだ。處が其處は城市に隣してなかく、かまびすしかつたので、それを非常に厭ふた彼は、壁上に一首の歌を認めて、風の如く去つて、一笠一鉢、意に任する身とはなり、大和の名所舊蹟を訪づれ、長谷に至つて斷食して、念佛一七日に及び、室生にしては煉行三七日に及んだ。「義剛遺事」には、現の身をいとふて、此處で形骸を棄てようとしたとも傳へて居るが、再び高野山に登つて、圓通寺快圓に菩薩戒を受け、持律益々清苦した。

二 水戸義公激賞す

其後泉州久井の里に往き、山水の奇を愛して其處に住み、三藏を盡し 自他宗の章疏及び儒典詩文集に於ても涉獵せぬといふことなく、彼に従つて學ぶものも亦少くなかつた。又池田川の陲に居て、徧く皇朝の實錄古記を読み、専ら國歌を好んで

廣く其の書を涉獵つた。

延寶五年河内鬼住山延命寺覺彦について、安流灌頂を受け、儀軌二百餘卷を手づから書いて、生駒寶山寺にそれを納めた。同八年師匠手定寂したが、其の遺命によつて、妙法寺の住持となつた。契沖はそれは好むところではなかつた。然しながら、其處には父母が在したので、止むなく往つたのであるが、別に一室を寺の傍に構へて、孝養怠らなかつた。

水戸西山義公、長流が果さなかつた萬葉の註を彼に頼まうとしたが、固辭して參らなかつた。けれども公の古義を好めるをよろこび、遂に萬葉代匠記二十卷物釋二卷を作つて參らせた。其の開卷第一首雄略天皇大御歌に籠の字の訓を知らず、「こ」とよみ來つたのを、加太麻と訓じ、神代紀の無目堅間を考證した。西山公は其の卓

見を賞し、己れの思ふ所に合するのを奇とし、白金千兩絹三十疋を賜ふて、其の勞を犒ふた。

彼は其の賜もので、寺院を修覆したり又は貧乏人に頒け與へるなどして、一文だに自ら蓄へなかつた。

又「古今餘材」著はし、「明石の浦の朝霧」の歌の古註、眺望とし、或は行を送るとしたのを非とし、これは家山日に遠く、前程限りなき波の上、朝霧朦朧なる間に漂ふ旅懷を述べたもので、紀氏も羈旅部に納ると説いた。義公これを讀んで、掌を抵つて、

「千古の發明ぢや。」と賞し、書を送つて相見えんといふ事であつた。けれども彼は「拙僧林壑の性、公侯に調なるに慣はず。」と言つて、遂ひに就かなかつた。

其のうちに、母氏が歿すると、彼は院を退いて、難波の高津に住み、庵を圓壽庵と號し、俗客を謝し、清修目適した。義公は時折物を賜ひ、或ひは書を送つて其の安否を問ふたが、やがて義公も薨じ、續いて元祿十四年正月二十五日定印跣踏を結んで寂す、年六十二、庵の後に葬つた。

彼の病革まつた二十四日、其の徒に疑ふ所を問はしめた。其の時湧泉は問ふて曰く、

「師今阿字本不生域に住せりや否や。」と、彼は答へて曰く、「然り、凡そ人平等にして差別あるべし。」と、更に湧泉問ふて曰く、「平等差別異なるなきか。」と「心平等といへども、事差別あり、差別の中心平等に當り、老僧が事これを記せよ。」と答へたと云ふ。

彼の人と爲りは寛厚、人を愛し、頗る恭謙であつたが、苟も密教の上に邪義を説くものがあると、是れを闘ぎて避くる所がなかつた、其の論辯は、當時の有識と雖も、到底當る事が出来ない程であつた。また其の記憶力は他に比類なく、圓珠庵で萬葉を説くに當つても、古今の事實援引せる所の詠歌など、始めから考へるでもなく、綿々として口に出でて絶えず、連珠の函を出づるがやうであつたといふ。また或る人が彼に、

「貴僧は餘程古歌を誦んじてゐらつしやるでせう」と訊いた時に、

「いや、僅かなものぢや、三千首以上は知り申さぬ。」と答へたといふ事である。

岩佐京傳

一 長唄も誦も駄目

京傳は初め姓を灰田と呼んだが、後に岩瀬となつた。初名を田藏と云ひ、字を甚太郎と云つたが、後改めて傳藏と稱し、醒々老人又は山東庵と號した。京傳の父傳左衛門は、伊勢の生れであるが、幼い時分に父母に連れられて、深川木場の伊勢屋といふ質舗に奉公して居るうち、其家の主人に見出されて養子となり、三男二女を擧げた。即ち長男は京傳の傳藏であつたのだ。

母といふのは、尾州侯の御殿に宮仕へした女で、兩親とも伊勢屋の夫婦養子であつた。十三歳の時まで木場で育つた京傳は、或る事情の爲めに兩親が伊勢屋を離別

になつたので、父母に伴ふて銀座に移つた。そして傳左衛門は、銀座二丁目の差配を勤めて居つた。

京傳の父傳左衛門は、昔の人には珍らしい人物で、我が子の京傳の教育にしても至つて放任主義であつたため、京傳は好き勝手な真似をする事が出来た。其の頃堺町に長唄の師匠の某といふのがあつたが、其處に通ふて長唄の稽古をはじめた。處が如何にも聲が悪いので、

「とても乃公には、長唄なんか粹なことは出来ない。」と言つて、自ら愧ぢて廢めてしまつた。

長唄を廢めた京傳は、今度は北尾重政について浮世繪を學んだ。そして政濟といふ畫名までも貰つたが、此の方も一向上達の見込みがなかつた。

「こりや不可ん。是れも乃公には不向きだと見える。」と言つて、繪筆を投げ出して、それからは只だ吉原通ひにのみ耽つて居つた。

「これだこれだ。これが乃公には一番適して居る。」と、殆んど家に寝る事はないほどだつた。

「好きな真似をさして置くが可い。」

父親は例の放任主義で、京傳の吉原通ひに對しても、何事も言はなかつたが、追がに母親は心配であつた。ある日のこと、ひそかに京傳の文庫を開けて見ると、中には仲の町の茶屋から來た、揚代の書出しばかりだつた。それを見て驚いた母親は、

「あなた、此の通りでございますよ。何とか御意見なすつては如何でございます。」

「意見をしろ……だが、どんなに遊んだからとて、あれがこれまで、家のものと云つては、紙一枚にも手をつけた事はない。衣裳調度を代にして遊んではゐない。して見れば、あれには遊べば遊ぶだけの才識があると見える。何も餘計な意見などをして、却つて批ねさせることもあるまい。」

言はれて見ると、なる程其の通りであつた。如何に吉原に入り浸りになつて居つても、遂ひぞ一度着物などでも脱いで来た事もなければ、父親に祕密で小使錢の無心をした事もなかつたので、母親もそれからは、京傳の身について、餘計な取り越し苦勞をせぬことにした。

二 草双紙の獨り舞臺

天明年間、常に遊里に出入して、十八大通と稱して、華奢風流を競ふ者があつた。

其の大通の一人に、藏前の札差で、俳名を文魚と呼ぶものがあつたが、それは京傳の友人たつたので、京傳は體の好い野帮間といふ様な格で、何時も文魚に隨ふて遊里に出入して居たので、遊興費なども悉く文魚の手から出て居つた。

京傳は先天的狂才があつた。自分でもそれを認めてか、草双紙などを書いて、戯作者の眞似事などを好んでして居つた。

當時その名を賣つてゐた戯作者には、戀川春町、芝全交、平澤喜三二などがあつた。勿論京傳は、其の足許にも及ばなかつたが、何しろ常に遊里にのみ入り浸つてゐたので、自然其の間の消息に明るかつた。そこでそれを材料として、所謂洒落本の方に力を注いだ結果、いくらかの讀者も出來た。

何とかして名を賣らう——といふ、賣名に忙かしかつた京傳は、「山東京傳」と染

め手拭をこしらへて、神社佛閣などへ納手拭をしたりなどした。

京傳の號の如きも、京橋に住んでゐて、名を傳藏と呼ぶところから斯く附けたのだつた。また當時有名な狂歌師であつた、四方赤良、元木阿彌など、交はつて、何處で集合があると言つても、寄り合ひがあると云つても、必ず出席して居つた。それも皆な名を賣らうといふ目的に外ならなかつた。

其の後、即ち天明の末、是れまでの草双紙が、其の筋の忌諱に觸れて、悉く絶板を命ぜられたので、道樂に書いてゐた、比較的身分ある春明や喜三二や全交などは、言ひ合した様に筆を執らなくなつたので、京傳の獨り舞臺となつた。さうなつて來ると、京傳も油が乗つて、近頃では吉原へも通かず、自分の家の二階に閉ぢてもつて、せつせと筆を運ばせて居つた。

「それ見なされ、やるだけやれば行かなくなる。」「まあ近頃では、書き物に一生懸命でございますが、あんなに詰めて書いてゐては、病氣にでもなりはせぬかと、心配でございますよ。」「は、ム、ム子に甘いは女の親とはよく言つたものぢや。」と、子煩悩の母親を笑ふ父親は、放任主義だけにまた子煩悩であつた。

三 押しかけ嫁御

「傳藏や、女のお客様だよ。」

或る日の事だつた。母親は笑ひながらかう言つて、草双紙の筆を走らしてゐる。京傳の二階の室にあがつて來た。

「へえ、女の客……。」

京傳は眉をひそめた。

「何でも菊園さんとか言つて……。」「えつ……。」京傳が驚いて起ち上る目の前に、女は恥かしさうな姿を見せた。母親は此の女が尋ねて来た時から、早くもそれと見てとつてゐたので、氣を利かして直ぐに下へ降りた。

「おい、何しにやつて来たんだ。」と京傳は父母の手前が困るではないかといふ風に言つた。

「私は年期が明いたのさます。」「ふむ。それでどうしたといふのだ。」「年期は明いても、何處にも行くところはありませんから、お前はんを頼りにして来たんさます。」

「おい、冗談ぢやないぜ。唐突にそんな事を言つて来たんぢや困るぢやねえか、阿父も阿母も居る處へやつて来てさ。」「否え、親御はんたちば、粹な方だから、お前さんが頼めば、きつと夫婦にして呉んなます。と御内所の旦那が仰有いました。」

「だつて、困つたなどうも……。」

半期が明いたら夫婦にならうと、約束位はした事があつても、それは一時の言葉で、かうして來られて見ると、扱てどうしたものかと迷はずには居られなかつた。

菊園といふのは、江戸町扇屋の抱へで、花扇の番頭新造であつた。固い夫婦の約束もしなければ、起請を取り交した譯でもなかつたが、さりとて斯うして頼つて來たものを、素氣なく振り切つて追ひかへすことも、實の處情に於て忍びなかつた。

仍で兩親にも話をする、素より放任主義を執る位であるから、「お前さん氣に入つて居たら、俺達のものではなし。」と言ふ事だつたので、此の菊園を女房にしたが、泥水に育つた女に似ず、氣質は素直で、縹緞とても十人並をすぐれ、舅姑にもよく仕へ、洒掃除から箒き掃除、水仕事まで忠實々々しく働くので、兩親の氣にも入り、

其の素性を知つて居るものは、「あの嫁御こそ、泥の中の蓮の花だ。」と言つて賞めて居た。京傳も心ひそかに喜んだ。

四 京傳の商買氣

草双紙が其の筋の忌諱に觸れてから、京傳の洒落本が獨り舞臺となつてゐるが、やがては草双紙より以上の弊害があるとして、洒落本が槍玉に上げられる事になつて、寛政二年幕命を以て洒落本を禁じて了つた。博奕、遊里、嫖客の事をものすのを嚴禁された。これ京傳の爲めには大なる打撃であつた。

或る日の事であつた。通油町の書肆耕書堂の主人、葛屋重三郎が訪ねて來た。

「お互ひにどうも酷い目に遭ひましたな。」「いやどうも。」「ところでどうです。此處で一つアツと云ふ様なものを出さうではありませんか。」と言つたが、性來肝ツ玉

の小さい京傳の事とて、

「新板を……一體どんな事を書いて可いのか、薩張り分りません。」と言へば、葛屋は平氣に、「何に、矢ツ張り洒落本でさアね。」「えッ、禁制になつた洒落本を出すんですか。」「さうさ。大體お前さんはあんまり正直過ぎるから不可ない。いくら禁制だつて、それを正直に守つて、堪るもんですか、お互ひに願が干あがつて了ふ。趣向は此方の方寸にありませア。」

それから話は進んで、京傳はまた二冊の新板を書いた。一冊は「仕懸文庫」、一冊は「錦の裡」と云ふのだつたが、篇中の人物は、悉く鎌倉時代の姓名を用ひ、表紙の袋には「教訓讀本」としてあつた。場面なども鎌倉時代になぞらへてはあるが、其の趣に至つては、悉く其の頃の状態で、「仕懸文庫」は深川、「錦の裡」は吉原の事を

具さに寫したのだつた。

處が妙なもので、これが世間の好奇心に投じて、賣れるは賣れるは、製本が間に合はぬ程賣れた。勿論これは問題になつた。即ち板元の葛屋が町奉行初鹿野河内守の役宅へ召し出され、數日に亘つて吟味の末、利欲のために上を怖れぬ仕業、重々不届とあつて、板元は身上半減の處所、京傳は手錠、地本屋の行司二名が連累を喰つて、商賣構ひの上所拂ひとなつた。本は言ふ迄もなく絶板させられた。

然るに、京傳の名はそれがため却つて高くなつたが、小心ものゝ事であるから、蒼くなつて祿々食事も出来ぬ位、謹慎第一とあつて、小さくなつて蟄居してゐたので、五十日ばかりで手錠御免となつた。

葛屋重三郎は太つ腹な男であつたから、身上半減に遭つても、さのみ怖れもせず、

所拂ひになつた行司兩名には氣の毒だといふので、相當の合力をしてやつた。そして京傳の手錠が御免になつたと聞くと、今度は仲間の鶴屋喜右衛門と同道して京傳の處へやつて來た。

「今回はどうも飛んだ事になりまして、何とも申し譯がありません。併し思ひの外急の御赦免で、先づくお目出度うムいます。」「いやはや、どうも酷い目に遭ひましたよ。」と、京傳は元氣もなく、やつと輕くなつた手頸を撫でながら言つた。

「ところで、今日はかうして徳屋を同道して來ましたが、實は御承知の通り、明春の賣り出しに、何か一つ……。」皆まで言はせず、京傳は吃驚して手を振つた。京傳はやつと赦免になつたばかりであつた。それに直ぐまた筆を執らうなどとは思つても見ない事であつた。けれども、葛屋には義理があつた。のみならず今度の事では

身代の半分を取り上げられた。其の埋め合せをする爲に、鶴屋と合板にして一儲けしようといふのだつた。勿論一旦は京傳も断はつたが、蔦屋としては折角賣つた京傳の名を、此のまゝに終らしたくなかつた。もう一度利用して儲けたかつた。で、今度は其の筋に睨まれない様な草双紙といふ事にして、引受けるには引き受けたが、由來遅筆の京傳が、ビク／＼もので書くのだから、ぐづぐづして一向捗どらなかつた。

けれども、春の賣り出しには、數種の草双紙が間に合つた。尤もそれは、祕かに馬琴が代作したのだつたが、世間の人は勿論、板元でさへも知らなかつた。馬琴は京傳と異つて、筆を執れば一氣呵成に書き上げるのが常だつた。

今も昔も、文人の不定の収入で、生活の不安を感じる事は變らなかつた。京傳は

生活の安定を得るために、産業の資本を作らうと考へ、柳橋の萬八に、自分が會主となつて書畫會を開いた。處が當時はもうすつかり名を賣つてゐたし、友人なども非常に多かつたので、當日の參會者は二百人に近かつた。揮毫の席には當時の名あるもののみを網羅して、稀に見る盛會だつた。そして當日の上り高のうちから、諸雜費を差し引いて三十兩ばかりの金が儲かつた。それは寛政四年の五月だつた。

京傳は其の金に、蔦屋や鶴屋などから多少の借金をして、翌年の春、銀座一丁目京橋寄の木戸際に、九尺間口の借家をして、煙管、紙煙草入などの新店を開いて京傳といふ看板披露をした。京傳には筆を持つものに似合はない商賣氣があつた。京傳は戯作の才を商品の上になで應用して、煙管や煙草入れの形に、いろ／＼の趣向を凝らして賣りひろめたので、此の小さな新店は忽ち繁昌して、毎日の賣り揚げ高

が、八九十兩から百兩もあつたので、優に一家を支へることが出来た。けれども、京傳は算數は至つて疎かつた。算盤と來ては寄せ算も碌に出来なかつたので、店の事は一切父の傳左衛門に任せて、自分は相變らず遊里に出入したり、或ひは二階で筆を執つて居たが、筆を執りはじめると、完成する迄は熱心にかじりついて居た。家人が飯の案内に來ても、それを耳にも入れず、振り向きもしないのが常であつた。

五 勘定は頭割り

其のうちに、妻の菊園は血塊といふ難病にかかつて、晝となく夜となく、苦しさに唸き通した。京傳はそれを聞くのが忍びなひと云つて、吉原江戸間の源八玉屋で、馴染の新造玉の井の許に入り浸つてゐた。そして菊園の病があらたまつたとい

ふ知らせがあつても歸らず、臨終の時にも遂に歸らなかつた。京傳がさういふ妻に對する任打ちは、友人知己の間に決して好い感じは與へなかつた。何れも不人情だといつて、漸次彼から遠ざかうとした。

京傳は友人などと、茶屋小屋に行つても、或ひは神社佛閣などに參詣しても、茶代や中食代も勿論、其の場で頭割りにするのだつた。さうして、後に累ひを残さぬといふのが主義だつた。だから其の頃勘定を頭割りにする事を、「京傳流」といつて居つた。

京傳は妻の菊園が死んでからも、源八玉屋にのみ入り浸つて居つて、四五年間のうちに、家に居るのは僅かに十日足らずであつた。用事があつて京傳を家に訪ねて行つても家には居ないので、終るには用のあるものは悉く源八玉屋に行くといふ位

であつた。それでは京傳は、餘程金を費つたかといふと決して然うではない。あの華奢な廓であるから、世間普通の放蕩ものなら、無い金を無理算段しても、ぱつと遊ぶのであるが、京傳はそんな事はしなかつた。借り着までして見得を張る廓で、扮装も風も構はないで、衣裳などは大抵貰ひもので間に合せ、自分の金で買ふといふ様な事は何年に一遍といふ位、下襲には大籠から出す仕着せの古着を縫ひ直させて着て居た。それでどうかといふと、一枚の着物を十年の其の餘も平氣で着て居た。

「十年前に見た時もあの着物を着てゐるが、まだ矢つ張り同じ着物を着てゐる。」と言ひ言ひされた。それでも當人は一向平氣なものであつた。

それで金はどうかといふと、一日に一分以上は決して費はなかつた。何も華奢に

さわぐでもなく、唯だ毎日ぐづぐづと流連をして、あの廓の空氣に浸つて居れば好いのだつた。彼は性來の怠けものだつた。宵ツ張りの朝寝坊で、家に居ても己刻(十時)より早く起きた事はなく、髻が伸びようと、月代が蓬々とならうと、一向手入れをするでもなく、風呂の如きも、減多に入つたことがなかつた。夏や初秋の、汗のダク／＼流れるやうな時でも、大抵月に二度か三度、五度と入つた事は殆んどなかつた。冬から春になると、月のうちに一度か、二た月に一度位のものだつた。

京傳は瘦せても枯れても著述家であつたが、それでゐる文房具などが嫌ひで、書籍なども一冊も蓄へてゐなかつた。何か参考に必要なことがあると、いつも他人から借りて讀んで居た。何しろ系統だつた學問をした事のない京傳は、

「難かしい漢學などは、とても自分の柄ではない。國學にも大家が澤山あるから、

今更らそれ等の人と競つたところで到低及ばない。自分は唯だ二百年の風俗を、まだ本當に研究して見たものがないから、儒者も知らなければ、勿論國學者なども知らない。それこそ自分の畑だ。」と言つて、専心此の方面の研究に没頭した。だから好事に關する書籍があると聞くと、無精ものに似ず、遠い處も厭はず、何處までも出かけて行つて、それを借りて讀むのであつた。それからいささか骨蒸癪から、古畫などを愛する位に過ぎなかつた。

六 京傳にも此の惻隱

性來の無精者の京傳は、船や篤籠に乗る事も嫌ひだつた。

「江戸に生れた果報には、一生お膝元を離れないで、どんな事でも足りる。」と言つて、殆ど旅行といふ事をした事がなかつた。

處がある時であつた。蔦屋と鶴屋に連れられて、日光見物に行つた事があつた。すると大雷雨に遭ふと、治體彼は雷が大嫌ひであつたから、這々の體で逃げ歸つた事がある。

京傳の父傳左衛門は、

「旅は愛いものといふが、其の實此の位面白くて、そして身に爲になる事はない。お前なども、若いうちに旅をして、諸所方々の名所古蹟などを見て置かないと、俺の様に年を老つてから、あゝ若い時に行つて置けばよかつたと後悔しても駄目だが、一度位は東海道へも出て見るが好い。」と言ひ言ひしてゐた。

或る時また其の事を勧められて、自分でも其の氣になつたので、店の若いものを一人連れて、相州から駿州、浦賀、三島、沼津と經廻つたが、思ひがけなく行く

先きぐで大觀迎を受けたので、ラク／＼と百日あまりも過ぎしたが、自盡贊に思ひもよらぬ値が出たため、歸る時には二十兩あまりの金を剩して來た。

算盤は出來なくとも、胸助定のたしかな京傳は、金錢の事については、決して抜かる様な事はなかつた。さういふ男であるから、常に貸さず借りず主義を奉じて、友人などが困つて居るからと云つても、自分から進んで合力をする様な事は殆んどなかつた。

當時の戯作者と云へば、多くは武士の片手間の道樂でやつてゐたのだから、之れで金を儲け様などと考へるものはなかつた。獨立した一つの職業として、原稿料と云つて定めて取る様になつたのは、抑々此の京傳が始めだつた。京傳は一枚の短冊は勿論、一本の扇ふでも、悉く價定めて揮毫に應じて居つた。

京傳は旅から戻つて來て、其の疲れを休める間もない時の事であつた。折角溜めて來た金のうち、使ひ残りの十兩餘りの金を、何者にか盜まれた。さう京傳は血眼となつて詮議した。すると旅に連れて行つた若者の姿が見えなくなつたので、必度あ奴に違ひないと思つて、品川まで追ひかけて、其處で一晩中見張りをして夜を明したが、遂ひに其の姿を見出さなかつた。

一日置いてからの事であつた。京傳の許へ町奉行所から差紙が來たので、

「何だらう……。」と、驚いて早速出頭して見ると、白洲に引き出されて、首をうなだれて慄えて居るのは彼の若者であつた。若者は京傳の金を盗んで逃ける途中、三田の三角に泊り込んで、大盡風を吹かして居る處を、身分不相應と其の筋に睨まれ、引つ捕へられて吟味されると、如々と残らず白狀して了つた。

「京屋傳藏、此の者は其の方の家の奉公人に相違ないか。」「ハッ、相違ございませぬ。」「此の者の白状する所によれば如何といふ事、それも相違ないか。」「相違ございませぬ。」「シテ、盗まれた金子といふは何程ちや。」「ハッ……。」と言つたが、京傳は確と返答に困つた。それは當時の掟として、十兩以上盗んだものは死罪といふのだつた。憎い奴ではあるが、其處はまたこれまで使つた若者を、見す／＼死罪に落すといふのも可哀相だと思つたので、危なく十兩と言はうとしたのを、グツと呑み込んでマゴ／＼してゐた。

「これ、盗まれた金子は何程ちやと申すに何故答へを致さぬ。」「はッ、其の……え、其の金子は九兩……九兩と三分ほどでございました。」「確と左様か。」「相違ござりませぬ。」小首を傾けて居た吟味與方も、ハハアと察したもののか、にやりと笑つて、「ウム、宜し……。」と言つて、件の若者は入黜の上、叩き拂ひといふ刑を科した。京傳の様な金銭に執着する男にも、かういふ惻隱の情があつた。其の爲め若者の首はつながつた。若者は心のうちに手を合した。

七 丸藥の發明と遊興費

京傳の店、即ち京屋の店は存外繁昌した。そしてこれ迄の店では手狭を感じる様になつたが、幸ひ父傳左衛門差配中の醫者の家が空いたので、それを買つて引き移り、今度は更らに手広く商賣をする事になつた。さうして、讀書丸とか、奇應丸だとか、小兒無病丸だのといふ様な丸藥を製らへて賣り出したが、皆な京傳の考案になつたものだつた。而かもそれを自分の著書の中で廣告をするので、利いても利かなくても、買つて見たいといふ氣を起させて、賣れるは賣れるは、翼が生へて飛ぶ

様に賣れた。

京傳は斯うして一軒の店の主人となつたが、それでも例の廊通ひは止まなかつた。父の傳左衛門はもう年でもあるから、剃髪して椿壽齋と號してゐたが、それでも京傳では店の締めくくりが出来ないので、奉公人を使つて束ねさして居つた。中には、

「京傳、もう彼れ是れ四十の聲を聞かうといふ年をして、廊通ひは宜い加減に止したらどんなもんだい。」と言つて忠告をして呉れるものがあつた。けれども彼れが、彌八玉屋に通ふことは止まなかつた。

或る時であつた。剛染の玉の井は屏風の中を覗きながら、

「お前はん、もう起きたらどうでございます。」「起きた處で仕方がねえ、一體何時

だい。」「もう彼れ是れ午刻でもありんせう。」「さうなるかなア。」と言つたが、京傳はそれでも起き様ともせず、床の中で大きな欠伸をして、足を伸した。

京傳は今度のきりは半月ばかりの流連になるが、髪や髻は蓬々と伸びてゐた。それを流石に玉の井が見兼ねて、月代を勧めて見たが、「いかに何でも、こんな態を廊の髮結には見せたくねえ。」と云ふ。それでは私が剃つて上げませう。サア起きなまし。」「だつて、まだ睡たくつて仕様がねえ。」「まあその様な事を云ひざます。」「後生だから、もう半刻ほど寝かして呉んな。」「あれさ、本統に仕様のない人さますねえ、では可いからさうしてゐなまし。」と言つて、玉の井は自分で鬢盥や何かを運んで来て、まるで子供の月代でも剃るやうに、自分の膝へ京傳の頭をのせて、寝たまゝ月代を剃つてやつた。似たもの夫婦といふが、これは夫婦ではないにせよ、

約しい京傳に、此の玉の井は持つて來いの女で、遊女の身でありながら、何かにつけて随分とつましくして上草履の鼻緒までもすけて履いた位だつた。

京傳が數年の間通ひつづけ、玉の井が呼びつづけして、互ひに變らなかつたのはなるほど無理もない事であつた。

けれども、塵もつもれば山、僅かに一日一分の遊びでも、流連々々が何年間も續いては大きなもので、積り積つて五六百兩にも達したが、感心な事には、京傳は商賣の方の金には少しも手を觸れないで、悉く稿料や、その他不時の收入で支辨して了ふのだつた。

かうして廊に入り浸つてゐた京傳の許へ、或る時家から急使が來た。それは父の椿壽齋が大病といふ事だつた。彼は怠けものではあつたが、現金にも自分の事とな

ると、まるで火がついた様に性急になるのが癖だつた。椿壽齋の病は重くなつて、寛政十一年終ひに歿つた。

八 玉の井を落籍

父を亡つた京傳は、否が應でも店の方の束ねをしなければならなくなつた。恰かも其の時は三十九歳であつたが、實はこれまで米の相場も知らなかつたのである。そして父の歿後は、京傳がこれ迄の様な不身持では、到底も身上を守りたてゝ行く事は出来ない。どうしても後妻を娶らせなければならぬといふのが、親族仲間に起つた問題であつたが京傳はなか／＼承知しなかつた。老母と相談の上、ひそかに玉の井を落籍して家へ入れた。何しろ京傳と玉の井との浮名は、誰れ知らぬ者もな

い程だつたので、勿論他に好い客のつき相もなかつた。それがためにまた一年の年

期があつたが、僅かに二十五兩で親元身受と云ふ事に抱主の方でも承諾をした。

玉の井は家に入れてから、百合と呼んで居た。其の後は京傳もふつりと廊通ひを止めた。百合は當時二十四だつたが、前妻の菊園よりも標致もよく、それに世故に長けて居つた。京傳はそれから貸殖に心を寄せ、商賣の方もなかく機敏に立ち廻つた。

京和三年の夏の事だつた。善光寺から淺草へ出開帳のあつた時、並木のとある小店を八十日間の約束で借り受けて、餅菓子のお店を出したが、引札は言ふまでもなく自作の文句で、いと花々しく開業したが、目論見はガラリと外れて、此の時のみは失敗をした。併し彼としては、生涯に只だ一度の損だつた。

或る時だつた。女房の百合が帯が欲しいと言つた。其の時京傳は三步の金を出し

て、

「金は與るが、餘計なものを買うのは止したらよからう。」と言つた。「ではお金は要らないではありませんか。」と言ふと、「さうではない。締めるに不自由のない丈の帯がある筈だが、俺は金を惜むのではない。金は與る、けれどもしまつて置く帯ならば、金で貯つて置いた方が好い。」と言つた。其の後また玳瑁が欲しひと言つた事があつた。其の時も京傳は矢張りさう云つて金だけを與へたので、其の後は百合も、決して餘計なものを買はうとは言はなくなつた。

文化の初年、老母も父の後を追ふて亡なつた。其の後といふものは、店も奥の方も、悉く百合が一人で切り盛りして、丸藥までも自分で煉る様にした。斯うして骨身惜まず立ち働らくので、町内でも褒められものだつた。けれどもまた不幸は來た。

それは文化三年の大火のため、京屋の店も土蔵を残したのみで、他は悉く灰となつてしまつた。

其の火事のために、假普請に入つてゐる時、京傳は女房に向つて言つた。

「あア百合、今はお互ひにさう年を老つたといふのでねえから可いか、とても俺たちにはやア子供は出来めえ。商賣の方も近頃は面白くねえから、俺もつくづく考へた。仕合せな事には読み本の方が流行るので、其の方の収入は以前の倍にもなつてゐるんだ。だがそれは家の善悪に拘はる事ぢやねえ。今此處で普請をするとなりやア、出る金は一時にまとまつて出るが、返つて来るのは何時の事だか分りやしねえ。そんな事までして家を建てる事もあるまいと思ふ。それともしばらく此のまゝで我慢をするかだ。俺の考へぢや、金で残して置いた方が可かアねえかと思ふが、お前は

どう思ふんだい？」と、些か氣落ちのした様な顔をして言つた。

見得を張る廊に馴れた女房の百合ではあつたが、京傳の言葉に背いてまで見得を張りたがる様な女ではなかつた。

「それが宜うございませう。」と云ふので、京傳も其の氣になつて、せつせと原稿を書いて、稿料の蓄るのを楽しみにしてゐたが、間もなく百合の爲めに百五十兩を投じて、髮結の株を買つて興つた。其の株からは月に三兩づつの運上があがつて来るので、若し明日にも自分が眼を瞑る様な事があつても、女房の百合だけは喰ふに困らないと信じたからであつた。

それから弟京山の子を養子にして、百合の姪を貰ひ、書講遊藝なども残らず仕込んで、これを養子を配送せる積りであつたが、不幸にも其の娘は夭折した。

或る時であつた。京傳は馬琴に遭つた時、

「世間では俺の事を、肝つ玉が小せえと云つて貶してさうだが、前車の誠めを忘れたものは、作者だらうと誦工だらうと、皆な咎めを蒙むらねえ者はねえ。其中にあつても初めから無事なのは貴公ばかりだ。俺もかうして年來謹慎してるから、其の後は何事もねえが、若しまた今度やられるやうな事があつたら、それこそ再犯といふので、逆も軽くちや濟むめえと思ふ。尤も自分ちや謹慎してるても、どんな讒訴が因で、連累を喰はねえものでもねえから、此の頃毎月廿五日には湯島の天神へ月參詣をして居るが、第一ば信心になり、第二にはブラ、歩きに氣晴らしになる、序でに下谷淺草の方に居る友達を訪ねるといふ風で、一舉三徳だよ。」と言つたが、馬琴は、

「ハ、ハ、ハ、ハ、相變らず京傳式だな。」と言つて笑つた。

九 京傳の死と女房の發狂

京傳は弟の京山が、書齋を新築したので、其の祝ひに招ばれた。使者のものは舊友の北川眞顔、喜多村靜慮の兩人も來て居るから、どうか直ぐに來て下さいといふことを傳へた。それは恰かも文化十三年の秋で、京傳は翌春出版する草双紙の原稿に追はれてゐたのだ、好い加減な返事をして歸したが、使ひは度々やつてくる、それが僅に數町に過ぎない處だから、それでも行かぬといふ譯にも往かないので、夕月の頃家を出た。

弟の家に來て見ると、既に酒も出て、皆な懷舊談に賑やつて居つた。京傳は大酒家ではなかつた。けれども晩酌にはちびり、とやつて居つた。一つ二つと重ねて、

それからそれへと、在りし日の事などを愉快に物語つてゐるうちに、早や夜も大分更けたので、京傳と静慮とは連れ立つて暇を告げて外へ出た。

二人は一町ばかり歩行いて来たが、京傳は面を擧めて、急に胸先が苦しいと言ひ出した。そしてもう一步も前へ進むことが出来なくなつた。伴れの静慮は驚いて、種々介抱をして、やつとのことで、二町足らずの道を、それこそ虫の這ふやうにして、京傳の家へ歸りついた。家人も吃驚して、醫師の許へ駈けつける。けれども醫師が来た時には、もう人心地はなかつた。其の病名は乾脚氣といふのだつたが、其の夜の丑の刻、即ち文化十三年九月八日午時二時頃、遂ひに不歸の客となつた。享年五十六歳、女房の百合の歎きは一通りではなかつた。兩國回向院、縁寺で葬式が営まれた。蜀山人、眞顔、焉馬、豊國、馬琴、國貞などを初めとして、當時の

文士や書家連は、舉つて會葬した。

京傳の著書は、有名な「稻妻草紙」を初めとして實に數十種ある。

家は京山の長子に嗣がせ、京山は後見として妻子を引き連れ、京傳の家へ入つたが、百合には狭い物置を與へた。それでなくとも夫に死なれて、まるで失神したものの様になつてゐた百合の事であるから、人を恨み、人を恨んで、文化十四年、即ち京傳が歿つた翌年、四十三歳を以て狂つて狂ひ死をしてした。

京傳の生前に關係のあつた仙鶴堂、甘泉堂とが氣の毒なことに思つて、改元されて文政となつた其の年、回向院に大施餓鬼を營んだ。

松岡 恕庵

一 驚く可き記憶力

松岡恕庵、名は玄達、字は成章、怡顔齋とも號し、恕庵は其の通稱であつた。京都の人で、有名な本草學者であるが、山崎闇齋が創始した垂加の神道を學んでは、眞鈴潮翁とも言つた。

恕庵は其のはじめは本草者ではなかつた。山崎闇齋について儒を學び、後伊藤仁齋の門に遊んで初詩經を講じたが、草木の名を知らなかつたので大いに困むた。そこで稻生若水について本草の學を學ぶ事になつたが、彼の記憶力は殆んど凡を抽いて、本草の書を三遍目を通すと、すつかり暗記して了つた。そして俄かに學んだ

本草學であつたが、當時本草學の大家として、其の名を響かせてゐた後藤常之進などの右に出づる位であつた。

當時のあまたの學者たちは、本草の事と云へば、其の専門家の門を叩かず、却つて此の恕庵の許に來て問ふといふ風であつたので、本草の學者として其の名を知られる様になつた。

恕庵はそればかりに甘んずる事なく、あらゆる事を學んだが、其の數は實に百にも及び、中にも醫術に最もすぐれて居つた。恕庵は爲人儉素淳朴であつた。

恕庵は二つの倉を有つて居た。其の一つは漢書、一つは國書を藏めて居つた。それほどの彼も、火桶は深草の素焼に、紙をベタ／＼に貼つたものを用ひて居た。

「先生、火桶だけは何とか爲されては如何でござりまする。」

門弟が斯ういふと、

「いや、火さへあれば、容れものなどは何でも堪はぬ。」と答へて、相變らずそれを改めなかつた。

恕庵には善吾といふ俸があつたが、幼い時から絹の類を着せた事もなく、袴なども夏も冬も麻の袴を着けさせて居つた。門人達は餘り見苦しいといふので見兼ねて上等の袴を新調して贈つた。

恕庵はそれを見て、

「俺が曾て仁齋先生の講座に出て居た時、東涯はまだ幼なく、先生の側にあられたが、四時ともに白木綿の布子に白木綿の袴であつた。これを思へば、善吾は染色の衣類をつけただけでも奢つてゐる位ちや。貴公方の志は忝けなく頂戴するが、此

の袴はお返し申す。」と言つて、折角門弟が新調して贈つた袴も著けさせず、門弟に返して了つた。

二 蠟燭の屑を鬚つけの代用

或る日の事であつた。

「市助や、市助は居らぬか。」と、恕庵は下僕を呼んだ。

「へい、旦那様、何ぞ御用でござりまするか。」「うむ、これを、それらゝ分けて與へて呉れ。」と言ひつゝ、蠟燭の屑を撰つて、これは誰、これは某へといつて與へた。

傍らにあつた人は、不思議な事に思つて、

「先生、只今蠟燭の屑をそれらゝ分け與へになりましたが、あれは治癒何になさる

のでございますか。」と訊いた。

「あれかな。あれは鬢つけの代りぢや。」と平氣な顔をして答へたので、其の人は呆れて二の句が亞けなかつた。

また、南天の木なんてんの太い幹みきがあつた。恕庵じよあんはそれをとつて、家人かじんを呼び、

「これはなかくよい南天の木なんてんぢま。これを削けつつて娘むすめどもの簪かんざしにしてやれ。」と命じた。

あたかも其そのの頃ころの事こと、白銀はくぎんの調度てうどが國禁こくきんになつた。世間銀せけんぎんの細工物さいくもつをあづけて官にあつけたが、其そのの後ごまた年としを経て、白銀はくぎんの簪かんざしをしきりにさした頃ころ、娘むすめたちの頭あたまを見た恕庵じよあん。

「これく、銀ぎんは先年せんねん國禁こくきんとなつたものぢや。それに見れば銀ぎんの簪かんざしをさして居をる

が、なぜその様な事ことをするのぢや。」と咎とがめた。

娘むすめたちははたと返事へんじに困こまつたが、

「これは銀ぎんの色いろは致いたして居をりましても、まことは銀ぎんではござりませぬ。みな簪かんざし押しでござりまする。」と答こたへたので、

「左様さやうが、それはなかくよい細工さいくぢや。」と言いつて、事ことなく濟すんだ。

「今日は皆みなな花見はなみに伴つれて行くぞ。」

恕庵じよあんは或あるる年としの彌生やよひ、其そのの多おほくの門弟もんていを伴つれて花見はなみに出でかけた。

すると途中とちゆう、瓦かいらで船ふねの形かたちを造つくり、屋根やねの上に猿さるが座すはつてゐる花生はなぶに、小草こくさの花はなを

入れた賣物うりものがあつた。

「うむ。それは面白い。」

恕庵はしきりに讚めてゐるが、遂ひにそれを購め、書生に持たせて歩き出したが、一町ばかり行くと、

「ちよつと見せ。」と言つて、門弟の手からそれを取つて眺める。さうしてはそれを又門弟に持たせて、また一町ほども行くと、「ちよつと見せ。」と言つては、また門弟の手から受取つて眺める。斯うして幾度も繰り返し、

「此の猿はなか／＼巧みに拵へてゐる哩。」などと讚めて居た。餘程それが恕庵には氣に入つたと見える。

處が、其のうち門弟が、件の瓦造りを人の袖に引かけて毀したので、遽て門弟の一人は後へ駈け戻つて、更らに同じやうなものを購めようとしたが、もう前のもと同じのものはなかつたのだ、止むなく前のもに似たのを購めて來た。今度のは

猿が屋根の上へは居ないで、屋根の下に居るのであつた。恕庵は前のもを毀ちて、更らに他のものを購めて來たといふ事を知らなかつた。しばらく行くと、

「ちよつと見せ。」と言つて、門弟の手から取つて見ると、こわそも如何に、何時の間にもやら作りのもの、猿が、屋根の上から屋根の下に來て居つた。

「これは奇體ぢや。」

恕庵は忽ち扱てはと心づいたが、何喰はぬ顔で、

「これ／＼、これは前のは違つて居るの。」

門弟はあれほど師の氣に入つてゐたものを毀したといつては、必度叱られるに違ひないと思つたので、口を揃へて、

「其の様な事はござりませぬ。先生お見立てのものでござりまする。」と答へた。

「左様か……。」

恕庵は追窮して、門弟共の落度をほじくらすとはしなかつた。矢張り前のものと
同様に愛でたといふが、此の一事でも恕庵の人と爲りは充分に知る事が出来る。前
の娘どもの頭にさして居た銀の簪と言ひ、此の瓦の造りものと言ひ、決して知らぬ
ではなかつたが、「欺むきをうけて容るゝは長者」の意に外ならなかつたのである。

恕庵は、延享三年七月十一日歿つたが、其の著書としては「櫻品」を初めとして十
數あるが、津島如蘭、小野蘭山、岩永元浩などは、何れも其の門人である。

尾形光淋

一 光淋の好尚

由來名人とまで稱されたものは、多くは奇行に富んで一種の奇人であつた。光淋
も其の選に洩れなかつた。

光淋の姓尾形を一に(緒方)に作るのは、豊後の豪族緒方三郎惟茂の七世の孫惟春、
足利義昭に仕へて碌五千石を食んでゐたが、室町御所没落の後には浪人して、其の子
新三郎道柏、北野天神の畔にある尾形社に奉仕して、姓を尾形と改めたのによる。
本阿彌光悦の姉が嫁いたのは此の道柏であつた。當時は其の家至つて貧しかつたの
で、「彼廣貧乏な家に嫁がせねばよかつた」とは、里の父光二が、娘のために後悔し

た言葉であつた。道柏の母妙秀は明けても暮れても、正直と云ふ事を其の子に教へるのであつたが、やがては其の教訓に花が咲いて實が果る時が来た。報いられる時が来た。夫婦の仲に生れた新三郎道柏の代になると、家は再び榮えて、東福門院の吳服の御用を並める様になつた。光淋は宗柏の子宗謙の子で、光淋は本名を惟富、幼名を市之丞、通稱を藤十郎、號を方祝又は寂明、或は洞聲、伊亮、青々堂、長江軒等と稱した。

光淋は其の初め繪を狩野常信に學んだが、後母方の大叔父に當る光悦になづみ、俵屋宗達の筆意を慕ふて、別に琳風一派をなし、繪を以て法橋に叙せられた。

光琳は茶道を宗佐に學んだが、特に漆器の描金に妙を得てゐた。光淋の蒔繪は光悦の衣鉢を承けて、更らに自分の意匠を加へ、中にも硯箱、茶器などに至つては、

絶妙と稱せられて居つた。有名な光淋印籠といふのは、其の形を光悦の意匠に採り自分の創案になる描金法によつて、螺鈿で地を作り、上に金粉を塗つて、裏も總て金地となし、曾て梨地を用ひなかつたのが特色であつた。當時京洛の子女で、光淋團扇を持つて居ないものは耻とされ、光淋印籠を有たない子君士は、肩身が狭いとまでされた。其の一事を見ても、如何に光淋の好尚が一世を風靡したがが判るであらう。

二 金泥の竹の皮を大堰川へひらく

名所も多い京の春、或る時銀座役人、豪商連、風流人といふ様な、何れも世に時めく人たちで、櫻狩りが催ふされた。今だに人の口の端に「京の着倒れ」とまで言はれるほどの京洛人、其の豪奢を衒ふのは、獨り衣服のみではなかつた。各々調度に

華麗を誇るのには勿論、金銀螺鈿の重組に、これ見よがしに豪華を衒ふた。其の中にあつて法橋雁金屋藤十郎のみは、ぶらさげて行つた風呂敷包みを解いた。中には見すほらしい竹の皮包みに、握り飯を用意してゐるのみであつた。其のあつ氣ない不用意に、連れのものには氣の毒があつた。

「雁金屋さん、今日はまた珍らしいお手軽なお辨ですな。それとも何か、別に趣向でもおすか。」「否や、何にもありません。」と言ひながら、光淋は竹の皮を披いた。見ると中は普通の煮めに握り飯。

「おや／＼。」と口に言はぬが、光琳にも似合はぬ趣向の無いには呆れたと思つて、連れれものは覗き込んだが、ふと口を開いた包皮の裏を見たものも、誰れしも呀とばかりに眼を睜つた。それも其の筈、普通の竹の皮だとのみ思つてゐるのに、裏に

は一面に押しつけた金箔、それが日に輝いて眩しいほどで、其の中に巧みを凝した山水花鳥が、細やかに浮きあがつて、梢の花の色をも奪ふばかりであつた。

「あつ、遺がは法橋だ。何がな趣向はあらうと思ふてゐたが……。」と歎賞した。

「何に、ほんのてんごうでござりますよ。」と、口では謙遜して居たが、其の日の優は勿論光淋にせしめられたので、一同も遺がは遺がだと囁き合つた。

嵐山の花見も、暮れ近くになると、そろ／＼家路につくものがあつた。銀座方の一行も歸り仕度、それぞれ貴重な重箱などを片づけさせたが、光淋獨りは暮れのころ花に、心ゆくまでに名残を惜しむでゐた。

「如何です、雁金屋さん。ほつ／＼歸らうではござりませんか。」「左様、もう仕度が出来ましたかな。」と言ひなから起ちあがつた。

「雁金屋さん。お忘れもの……。」「忘れもの？」光淋は見廻してゐるが、

「別にござりませぬ。」「ないどころか、趣向の竹の皮をお忘れで……。」「おゝさうく、これは飛んだ粗忽ぢや。此のやうな穢いものを残して置いては氣の毒ぢや。」といひつゝ、拾ひ上げると見る間に、大堰川の流へ、ひらく投げ込んだ。

「あつ、勿體ない。」と言つて、手をさしのべたものがあつたが、もう及ばなかつた。

かうした振舞が其の筋の耳へ入り、町人としてあるまじき奢侈だといつて、遂に料を蒙つて京を追はれたので、家財道具を賣り拂つて江戸に下つて、江戸でまた妙技を揮つて名を揚げた。

光淋の畫風は、桃山式の豪宕を化して、元祿時代の豪華を象徴したものであつ

た。山水一物、花卉翎毛、悉く金泥を交へて、浮色に艶美を極めないと云ふことなく、偶々水墨で描く時も、墨中に金泥を流して用ひるので、技巧の外に一種言ふべからざる風韻が粗密共に現はれ、豪者に馴れた當時の好事家には、實に持つて來いであつた。

光淋が一度筆を執るや、先づ其の意匠の奇抜に人を驚かし、大膽な手法のうち、寫生の精緻を交へ、一見不調和のやうで決して調和を失はず、豊麗と瀟洒の間を巧みに按排して、他の追従を許さぬ一派を成してゐた。

光淋が殊に草花の彩色に巧みだつたのは、曾て鞍馬口に設けた隠宅にある時、あらゆる花卉を前庭に滿栽して、暇さへあれば縁に出て寫生に餘念がなかつたがためである。

江戸に下つた光淋は、深川の大家冬木屋に寄寓してゐたが、一年餘りで赦に遭つて京に歸つたが、其の後は身を慎むで、其の晩年を送つた。そして京保元年六月二日、五十九歳で歿つた。(又一説には五十六歳或ひは六十二歳と傳へられてゐる。)法諡を「長江軒寂明青光淋居士」上京小川頭妙顯寺地中本行院に葬つたが、妻多代との間には三人の子があつて、總頭の壽市郎は、銀座役人小西彦九郎の養子に遣はし、彦右衛門と改め、次の勝之丞に家を嗣かせ、三男宗右衛門は大阪の豪商石井吉右衛門に養はれたが、勝之丞が早世したので尾形家は終に斷絶した。

尾形乾山

一 兄光淋を凌駕する腕

尾形乾山は光淋の弟で、光淋の豪華に比べると、一層禪味を帯びて、一層名人肌の男であつた。畫は兄の光淋に習つたのであるが、却つて兄を凌駕するものさへあると稱されてゐる。名は惟元、通稱を權平、學問茶事を藤村唐軒に學び、一説には畫は狩野安信に學んだとも傳へられてゐる。禪は嵯峨の獨照和尚に參して造詣深かつた。

乾山は陶器を製する事が巧みであつたので、これを乾山焼と稱へて、世の賞美する所となつてゐた。そして京師皇城の乾に當る鳴瀧山の麓に其の窯を築いてゐたの

で、即ち乾山と號したのだつた。

乾山は和歌を廣澤長好に學んで能くしたが、兄の光淋に劣らぬ賣つ兒であつた。乾山の陶器に於ける技は、光悦の風を承けてゐたが、特に岡崎圓滿院の門主、寛尊法親土の知遇を忝ふしてゐた。宮は東山院の第三皇子で、當時二品、正徳二年二月東に下つて、上野輪王寺に住し、御名も公寛法親王と改めさせられ、次いで享保二年二月、二十二歳で一品に叙し、天臺座主に上らせられ、お氣に人りの乾山は宮に従ふて東に下り、久しく入谷に住んで居つた。

二 拜領の小袖で泥仕事

或る時であつた。乾山の居に輪王寺の宮からの使者が來た。

「何事だらう？」と、乾山は取るものも取り敢へず伺候した。

其の姿はと見ると、土いぢりをしたまゝの泥だらけの仕事着であつたので、ひそかに眉をひそめるものもあつたが、當人の乾山は一向平氣であつた。其のまゝ官の御前に出た。

宮は乾山の服装を眺めて微笑みながら、

「乾山、よう參いた。相變らず土にまみれて居るのう。」と宣給ふた。

「はつ、急のお召と承はりました故、實は其のまゝ伺候いたしました。」と、自分の姿を願て、初めて餘り酷い服装であつたと氣がついたが、

「これは恐れ入りました。なるほどそれでは餘り穢くるしい。」と獨り語のやうに言つた。

「はゝゝゝいやよいゝ。其の構はぬ處が氣に入つたのぢや。褒美として小袖を

遣はさう。早速着替へて苦しくないぞ。」

下されたのは、黒羽二重の小袖、下着もちやんと揃ふて居つた。

「はつ、忝なうござりまする。」

乾山は早速拜領の小袖と、泥まみれの仕事着とを着替へたが、やがて御用が濟んで家に歸ると、拜領の小袖のまゝでまた泥いぢりを初めて、一日も経たぬ間にこれをも泥まみれにして了つた。

乾山はすべて自畫を陶器に焼きつけたが、頗る風韻のあるものであつた。京の邊鳴瀧村にある時は鳴瀧乾山、江戸に下つて入谷に住んで居る間は入谷乾山、下毛の佐野へ聘せられて、暫らく同地に赴むいてゐるが、其の間は佐野乾山と稱せられて、それ／＼特色を發揮した。

乾山は晩年に及んでも、妻も子もなかつたので、本所六軒堀の材木問屋築島屋裏坂本米舟の長屋に住んで、日々泥土を友として、拵へ上げる陶器をその子とも楽しんでた。

乾山は幼少の頃から従ひまゐらせん法親王が、まだ壯年の御身で老ひの乾山に先立ち給ふたので、哀悼に堪へず、六首の歌を詠んで残る命を嘆じた。其の後は快々として樂しみます、寛保三年六月二日、

うき事も嬉しき折も過ぎぬれば

たゞ明け暮れの夢ばかりなる

の一首を辭世に歿つた。年恰かも八十一、坂本藥王山善養寺に葬むつた。

佛 佐 吉

一 佐吉の正直

佐吉は美濃羽栗田竹ヶ鼻に生れ、姓を永山と呼んだ。其の佛佐吉と云ふのは、其の性質が極めて正直であつたがため、誰言ふとなく、佛佐吉・佛佐吉と呼ぶやうになつたのである。

佐吉は幼い時から、至つて孝心深い男であつて、親を大切にする位の男であるから、他人に對しても、深い憐れみを有つて居つた。佐吉は幼けなき時、尾張名古屋の某といふ家に僕奉公をさせられた。佐吉は學問が好きであつたが、奉公の身ではなかなか學問などをして居る暇がなかつたので、ちよつとの暇でもあれば、道端の

砂などに文學を書いて、手習ひをするといふ風であつた。

「これく、何を其處でして居るのぢや。」

此の家に出入りの某が、道端で砂に手習ひをして居る佐吉を見て聲をかけた。

「はい、手習ひをして居りました。」うむ、感心な奴だな。お前はそんなに學問が好きか。「はい。大好きでございます。」さうか、ぢやこれを讀みなさい。分らない處があつたら、俺の家に、暇を見て習ひに來なさい。」と言つて、懷中から取り出して、佐吉に與へたのは四書であつた。

「有り難ふございます。」

佐吉は如何ばかり嬉しかつたであらう？ それからは熱心にそれを讀みはじめた。そして判らないところがあると、ちゃんと印をつけて置いて、朝他のものよりも早

く起きて、自分の爲るだけの仕事をさつさと爲て了ひ、某の家に駈けて行つて、まだ某が床の中にあるのを、其の枕許に侍つて習つて来る。佐吉が歸つた頃になつて、閉翬は睡氣眼を擦つて起きるのであつた。

斯うして佐吉が、主人に對しては忠實くしく働き、其の余暇に學問をするといふのが、朋輩共は妬ましくならなかつたので、寄つて集つて、佐吉は讀書にことよせて、遊び歩いて居るのだと主人に告げ口をした。

「佐吉や。」「へい。」「お前は實に不埒な奴だ。學問の稽古をするといつては、遊び歩いてゐる相だな。お前の様な者を家に置くと、他の者の爲にならぬから、暇をやるから家に歸れ。」

主人には佐吉を見るの明がなかつた。讀書に事よせて、惡所遊びをしてゐるとい

ふ、根もない讒訴を事實だと思つて、酷く叱りつけた上、遂ひに竹ヶ鼻にかへして了つた。

佐吉は別にそれを言ひ聞かうともせず、暇を出されて故郷に歸つてからは、綿の中買ひを始めた。

「オイ、綿屋さん。お前秤はどうした。」「へい秤はムいけません。」「冗談ぢやないよ。綿を賣り買ひする人が、秤が無くちや商賣が出来やしなないぢやないかね。」「へい。これは何斤ございませう。」「さうだな。十二三斤もあるかな。」「では十三斤といふ事にして頂きませう。」

佐吉は買ふ時は賣る人に任せ、賣る時は買ふ人にまかせた。後には佐吉の正直ぐなどが響いて、決していかさまな事をする様な事もなく、他の者には賣らないで、

佐吉が廻つて来るのを待つてゐるといふ風になつた。それがために貧乏であつた佐吉も、豊かな暮らしをする様になつた。

理不盡な暇を出した主人ではあつたが、佐吉は決して恨むやうな事をしなかつた。用があつて名古屋に來ると、必ず往き歸りに舊主人の家に立ち寄つて、其の安否を問ふてゐるが、其の後主人の家は、不幸にも大いに衰へて、其の日の生活にも困る様になつたので、佐吉は金品を贈つて、之れを親切に慰めた。

二 山賊に快く金品を與ふ

佐吉は幼い時に父親に死に別れ、一人の老母を大切に、孝養怠らなかつた。或る時の事、

「佐吉や、私は餅を搗いて賣りたいと思ふがどつだらうね。」と年をいれた母親は言つ

た。何も餅を賣らなければ其の日の生活に困るといふ程の暮しでもなかつたが、母親の言ふ事だと云へば、何んな事でも、逆らつた事の無い佐吉の事だから、

「然うですか、それぢや餅屋を始めませう。」と言つて、其の準備をした。さうして、いよく餅を搗いて店に出すといふ事になると、

「おつ母さん。なるだけ餅は小さくしなさい。」と言つた。母親は審かしく思つて、

「何故小さくするのだえ。小さくしたら賣れないではないかえ。」と訊くと、

「近くに餅を賣る家があります。家のを大きくすると、あの家の餅が賣れなくなりますが、それでは氣の毒ですから、成るだけ小さくしなくちや不可ません。」

佐吉が母親の云ふ事に逆らはなけりや、母親も亦佐吉の言ふ事を逆らつた例がなかつた。

「さうかへ。ぢやなるべく小さくしませうよ。」と云つて、他の店の餅よりも、すつと小さくして賣り出したが、それでも他の店と同じ様に買うものがあつた。

佐吉は或る年の師走、近國へ懸金を集めに行つた。其の歸り途中、日を暮らしたが、泊るべき家もなかつたので、せつせと夜道をして、山を越えて居つた。するとある木蔭から、不意に一人の大男が現はれて、佐吉の行先ににゆつと立つた。佐吉は吃驚して居ると、

「やい。愚圖々々言はねえで、持つてるだけの金をみんな出してしへッ。」と云ふなり、ギラリと刀を閃めかした。其の男は山賊であつたのだ、金を與るまい奪られまいと思へばこそ盜賊が恐ろしい。佐助は山賊だと思ふと落ちつき拂つて、

「俺も以前は其の日の生活にも困る様だつたが、今日では此處に持つてるだけの

金を與つたところで、困る程の事もないから、今出して與らう。」と言ひつゝ、胴巻の中から持つて居ただけの金を出して山賊に興へた。

金を奪つた山賊は、今度はまた、

「さあ、今度は其の着物を脱ぐんだ。」と言つた。

「着物も脱げといふのか。宜し／＼。」と言ひながら、着しるた着物を脱いで山賊に興へた。

「どうだい。それでもう充かな。それでも足りなかつたら、俺の家に來なされ。家屋敷から、其金みんな、道具の端々に至るまで與りませう。」「もう宜い。」「然うか。ぢや街道に出る道を教へて貰ひたい。」と言つた。行き暮れた佐吉は何時とはなしに、街道から踏み迷つてゐたのだつた。

「宜しく。だが、一體これから何處に歸らうといふのだ。」「俺は竹ヶ鼻に歸るものだ。」と答へた。山賊は闇を透して、佐吉の顔をしげんと見て居たが、

「竹ヶ鼻に歸る……すると貴方は、竹ヶ鼻の佛佐吉さんぢやございませぬか。」「然うだ。俺は竹ヶ鼻の佐吉といふものぢや。」「否や、それはどうも飛んだ事を致しました。どうか御辨下さい。明日乾分の者に持たして、屹度お届けさせますから。」「いや〜。お前たちに與つたものを、また取り戻さうとは思つてゐない。」と言ひながら、さつさと教へられた道を歩いて行つた。

扱て翌日になると、果せるかな、彼の山賊の乾分は、前の晩に取つたものを悉く揃へて持つて來た。佐吉はどうしても要らないといつたが、山賊の乾分はそれを置いて、逃げる様に走り去つて了つた。

三 路傍の穀物を拾ふ

佐吉は或る時、諸國の神社佛閣を巡拜しようと思ひ立つて、母にも暇を告げて、其處此處と廻り廻つて、恰かも出羽の邊に來た時、病に冒されて、既に其の一命さへも危うくなつた、孝心深い佐吉は、切めて今一度母に逢はしめ給へと、一心不亂に神佛を祈念した。すると不思議にも、今まで其の一命をあやぶがつて居た佐吉は、忘れたやうにケロりと全快したので、佐吉は大急ぎで故郷に戻つて、母親に如々と物語つた。

「それは、皆な佛様の御加護ぢやぞえ。佛像をこしらへて、お禮を申上けるが宜いぞえ。」と母親が言つたので、佐吉も其の氣になり、其の江戸で有名な、某といふ佛師に佛像の鑄造を頼むだ、やがてそれが出來上つて、船で以て送る途中、遠江灘

で暴風雨に逢つて、船は今にも覆へり相になつたので、積んでゐた荷物は悉く海中に投じた。其の時此の佛像も矢張り海底に沈めた。船頭は其の事を佐吉に告げて、どうか許して貰ひたいと詫びると、佐吉は却つて喜んだ。

「それはよい事をした。遠江灘は昔からどの位人の生命を奪つたか知れない。其處に佛像が沈ませ給ふたといふことは此の上もない事ぢや。して見れば決して費えといふものではない。それでは今一體急いで鑄奉つらう。」と言つて、鑄造の料を船頭に托して、今一體の鑄造方を頼むた。船頭達は次ぎの便で江戸へ行つて頼むだが、間もなく出来して、今度は無事に佐吉の許に届いたが、今も其の佛像は竹ヶ鼻に残つてゐる。

佐吉は、死んでしまつてからの百味の珍膳は甲斐もないこと、それよりも生きて

居るうちに旨いものを喰べさして置かうと、母親をもてなすのに、あたかも尊容にでも接する様にした。

佐吉は母親に孝行厚く、家人に情深がつたと同時に、また世の中のためにも種々に盡すところがあつた。

「オイ、佐吉さん、お前さんは何時も袋を持って道歩いてゐるが、一體どうするんだい。」「これですか。これは途中に落ちてゐる、米だの豆だのを拾つて入れるものですよ。」「そんなものを何も拾はなかつたつて、生活に困る譯ぢやありませんまい。」「なに、拾つても自分で食べようといふのぢやありません。冬になつて雪が降ると、鳥どもが餌がなくて困るゝがあるから、さういふ時に撒いてやるのです。」佐吉はちよつと外に出る時でも、袋を持たないことはなかつた。そして一粒の米、

一粒の豆なども疎かにはせず、丁寧ていねいに拾ひろつて袋ふくろに入れ、それを貯たくわめて置いて雪ゆきの日の鳥どりに撒まいてやるのだつた。また村内むらうちは勿論もちろん、近郷近在きんがうきんさいの上橋とほしが永雨ながあめで流れ相さまなも
のがあると、それを自分じぶんの財さいを投なげて石橋いしはしに直なして了しまつたり、悪い路わるみちの普請ふしんをした
りして、公共こうきょうに盡つすところがあつた。

佐吉さきちの至孝しこうと、世間せけんに對たいする所行しよぎやうとは、何時いつしか領主りやうしゆの聞きく所ところとなつて、多くの
米こめを褒美ほうびとして與あたへて感賞かんしやうし、何事なにごとでも望のぞむ事ことがあらば申まをし出いでよといふ事ことであつ
た。其時そのとき佐吉さきちは、

ありがたやかゝる浮世うきよに生なれきて

何不足なにふそくなき御代みよに住すむ哉かな

と詠よんだ。これは佐吉さきちが、己おのれの心こころを詠よんだもので、和歌者流わかしやりうの規矩きくを以もつて論ろんすべし

ではない。

老後らうごは覺翁かくをう又は實道じつだうと稱となへて居まつたが、寛政元年くわんせいげん十月十日じふにち、八十九歳はちじゅうさいの高齡かうれいを以もつ
て歿みまつた。

横井也

一 也

也有は尾張の士で、姓を横井、俗名を孫左衛門と稱し、篤實謹厚、文雅を好み、殊に俳諧に長じてゐた。也有は芭蕉の流れを喜んだが、曾て風流に師を求めた事もなく、また自分でも決して弟子を取らなかつた。

「獨り樂しむ俳諧に、鹿爪らしい師弟の状は、厭はしくもあり、まな愧かしい事ぢや。」と云つて、偶々推敲を頼む人々さへ、自ら謙遜して、教へるといふ様な、師匠がましい事をした事がなかつた。

也有は六十の齡を重ねた時、一人の門弟を得た。その門弟は、漸く今年二歳の乳香兒と聞いて、世間の人は驚き且つ呆れた。也有は狂氣したのではないかとまで風評した。

也有は人の風評などは氣にもかけず、其の乳香兒の門弟に、晋路といふ名をつけしたが、當時の文に曰く、

「師に對して未だ一字の間をなさじ、我が物ぐさを勞せざる事、深切最上の門弟、いづれの人か是にしかん。我辭せずして約を爲すは此故なり。」と。

尙ほ也有が晋路に與へた文には、尙ほ師弟の關係を述べて居る。それには、
「古人も和歌には師なしと言へり。況んや俳諧に於てをや。唯だ法式だけを學ぶべきである。併しながら、それも道に交はれば自ら知れるもの、法は天下の公道で、普ねく人の知る事を旨とする。秘すべき法のある筈はない。世に秘事傳授といふも

のは、皆渡世にする者の術である。自分は渡世の爲にするのでないから、固より秘事口決は習はず、習はねば何をか秘し、何をか包むものがあらう。五倫五常の師は外にある。俳諧の道と混じてはならぬ」と。

或る時であつた。京の松木淡々が、高慢振つて、自ら門戸を高うし、餘人の窺ふ事を許さぬと聞いて、自慢の鼻をへし折つて呉れんと淡々を訪ふて、初めて對面した。そして、

化物の正體見たり枯尾花

と吟んだが、淡々は大阪の生れで、初め江戸に出て其角に學び、後京に歸つて宗匠となつた。其の俳名は洛陽に高く、著書も數多あり、京師三十一人の宗匠の一人である。云はば也有的爲めには先輩だつたのだ。

也有は千三百石を食み、君公の覺えも目出度く、生活向きは裕福であつたが、決して奢らず、風雅は總て簡素を専らとし、名聞を斥け、三十五歳の秋、即ち元文元年に定めた「俳席の掟」には、次ぎのやうに誠めて居る。

一、飯は三石の掟を守るべし。

茶の花の頃を奈良茶も盛りかな

一、汁一つ菜一つ、酒の肴も一つに限りて、鯉に精進の咎をのがるべし、夏は必ず茄子を用ひ、豆腐は三季にわたるべし、香の物は論ずるに足らず。

音も香もせぬや豆腐の冬籠り

一、酒は膳の前後すべて、三杯を過ぐべからず、さるから、盃は得道具をゆるすべし。

いかさまに四度はくどし村時雨

連衆に酒好ありて、此箇條の掟にはなはだ苦しむ、よつて了簡の一句をしめす。

狐さへ五こんと吃る霜夜かな

一、菓子是其日のあるに任す、まづは煎豆に定むべし。

煎豆に音こきまぜてあられ哉

一、燈は行燈にて事足りぬべし。

蠟燭は立つといふ名の寒さ哉

右の條々、今日より固く守るべし、亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も古し此約束を空になして、厚味を求むる輩あらば、後の世蠅と生れて、風雅

に不信第一の人とすべし。

誓文は立てぬ筈なり神無月

酒は固より、深くは好まなかつたが、上戸の席にも連なることを辭せなかつたので、少しは飲み馴れて、どんな長つ尻の酒飲みの相手もする程であつたが、間もなくそれも一切禁じて終つた。其の時の句に、

花らば花の留守せん下戸一人

と吟んだ。

また、彼の「斷酒辯」によると、

「近きころいたましよう酒の中りけるまゝに、藻にすむ蟲と思いたつ事ありて、試みに一月の飲を絶てば、身はなら柴の木下戸となりて、花のあした、月の夕、

かくてもあらねけるものと、はじめて夢のさめし心地ぞする。」
と記して居るが、それはまた彼が四十にも満たぬ頃の事であつた。

二 ちやうぐわつが来た

也有が晋路を得た次第は斯うであつた。彼は若い時分から虚弱であつたが、年を老るに従つて益々無精になつた。そして春になつても炬燵の傍を離れないで、春を圓くして俳諧三昧に日を送るのであつた。

或日彼は前津の隠宅に在つて、春の暖かい日光を障子に受けた室で、まだ嘯りも自由でない、鶯の聲に耳を澄まして居ると、偶と戶外に子守唄の聲が聞えた。彼は何心なく開けて見ると、其處には十三位の愛くるしい子守が、子供を負つて日向ほつこをして居つた。

「おゝ、可愛い子ぢや、何處の子ぢや。」「あい、此の先きの竹内様の坊ちやまでござんす。」「おゝ、あの竹内の子か、幾つぢやの。」「明けて三つにお成りでござんす。」
「ほう、して見ればまだ二つと言つても可い位ぢや。うむ、利巧相な、まことに好い子ぢや。そんなところにゐては、日向とは云へ、まだ風が寒い、些と此處へ来て、炬燵にでも暖らせてやつたがよい。」「有り難ふござんす。」

子守の方では、也有を見知つて居るので、別に遠慮もしないで、布子を解いて、子供を縁側に下した。

「うむ、はゝゝゝよく太つて居るの、どうぢやの、歩行は……。」「あい、よう歩行をなさります。」「さうか。よい子ぢや〜。坊や、何を與らうかの。」

子供が至つて好きな也有は、自分の子の様に扱はつて、菓子盆の蓋をとつた。

「うまく、ちやうぐわつが来た、うまくを、おれも喰はう。」
 子供は廻らぬ口で斯う云つた。也有はもう自分の子が、斯んな事を言つたかのやうに夢中になつて、

「は、ムムムこれは偉い。よく言が云へる。何と云つた、正月が来たうまくをおれも喰はう……か、立派な發句ぢや。自然に口を衝いて出る、全くの俳諧といふものはこれぢや。坊や、なか／＼偉いものぢやの。」

それから此の子供を、前に述べた様に門弟として、晋路といふ名を與へたのだつた。

三 晩年と辭世

也有は官に在る頃、屢々參觀の供をして東海道を上下した事があつた。或ひは木

曾路を往復した事もあつた。

その他、暇を偷んでは、京大阪は勿論のこと、伊勢路、相模、武藏野などに紀行し、山水風物を友とする一面に於て、諸國の人情風俗をも親しく究め、それは彼の日記に細々と記されて居る。

彼は五十歳位の時に隱居をしたが、其の時も「隱居稿」といふものを認めて、

四角なる浮世の風はしまひけり

と吟み、次で頭を丸めた時には、「剃髮辯」といふものを書いて、

「これを吉田の法師にとへば、冬は如何なる處にも住める、あつき頃わるき住居は堪へ難しとぞ、是こそ此爲の師なりけれ、誠に頭巾といふものあらざらむや、手水行水にさはるものなく、襟に垢しみず、枕に油つかざらむは心も共に

清かるべし、夏をむねとこそ思ひ定めて、つひに剃るには極まりぬ。」
と記して居る。また父母より貰つた身體を毀つといふ事に就ても、

「雙親世にましませし時、老後は共に剃髮の望もおはせしかども、その世はいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれを知る、故に且はかの遺骸を以て、寸志を繼ぐともいはいふべし。」
といふ辯疏がしてある。

彼は隠居してから、總ての什器なども、平素の川と曠の用と、二通り備へて置くさへも煩はしいのに、知己の人々から、風流の器具などを贈られるのを、無下に斷はるのも厚意に背くので、隠居とは名ばかりで、なか／＼樂なものではないと毀すのであつた。

六十の賀に當つても、他の人は彼方此方と詩を乞ひ、或は歌、書などを求めて、其の知己の多いのを誇るのであるが、

「自分には妻もあれば妹もある。又は男女の子もある。それ等のものには、嬉しいとも目出度いとも思ひますであらうが、他人に迷惑をかける事ではない。決して音沙汰をしてはならぬ。」と誠めて、

六十てふ身や夫だけのはぢ紅葉

と云ふ句なども、其の邊の心から吟んだものである事は明らかである。

彼の俳文は、芭蕉以後の第一人者を以て稱せられた。彼の友堀田文林の文集に序して、

(前略)世の俳人ともかうも五七五はいふべし、只俳諧の文章はかたし(中略)蕉

翁の文は正しくして俗中に雅を失はず、たとへばやごとなき人の編笠羽織にやのして花のものと床几によりたれど、田楽團子に手を觸れず、茶ばかり飲みてやすらひたるが如し、其位に至らぬ人や及ぶ事かたからん、東花坊支考が文ははたらきて逼らず、おもしろくいひなぐりて情を含ませたり、たとへば諸藝に勝れたる當世男の一座の興に三味線とりて、相の手ばかり弾きすてたるが如し、彦根の許六は、物の姿情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、やゝ卑しきに似たれども、さりとして雅趣のなきにあらず、たとへば何がしの忠右衛門など、人に顔よく見知られて、駒下駄に尺八吹きて、大道に肩いからし、あはれ傍らに人なきが如しといはん、其餘碌々たるは論に及ばず(下略)。

と論じて居る。

彼は蒲柳の質であつたが、八十三歳まで壽命を保ち、天明三年六月、

きのふけふと思ひつゝ、經し身の程ぞ

なか／＼ながき世はかぞへぬる

短夜や我には長き夢さめぬ

といふ辭世を残して歿つたが、其の八十の賀には、君公から特に壽筵をさへ賜はつたほどであつた。

太田蜀山人は、也有の文を推奨して、歿後三年、即ち天明六年から逐次板行して「鶉衣」「鏡裏梅」は、今日尙ほ斯界に珍とされてゐるのである。

鐵翁和尙

一 墨壺の窓で畫の稽古

鐵翁は長崎の生れで、俗姓を日高氏、法諱を超玄と云ひ、祖門又は鐵巖と號した。其の父は大工であつた處から、彼も幼い時には墨繩の技を學んだが、天性畫が好きで、ちよつとの暇でも墨壺の窓で、さまざまの形を描いて、それを何よりの楽しみとして居つた。

「何だ、またそんなものを描いて居るのか、大工の子が畫なんか描く稽古をしなくとも可い。そんな暇があつたら、鑿でも磨いて置け。」と言つて、父は常に叱つて居つた。

けれども、彼は些しもそれを改めなかつた。父から叱られれば、父に隠れて描き描きして居た。其の頃土地の文人で、吳周藏と云ふものがあつた。周藏は楓山又は黒酣と號して、畫に堪能であつた。其の周藏が彼の風評を訊いて、其の描いたものを見て、いかに感心して、生れついた好きな道をさせないで、氣の進まぬ大工で一生を終らせるのは可哀相だ。好きこそ物の上手なれといふ事があるから、好い師匠を求めて學ばせたならば、必度一廉の畫師として名を擧げる事が出来ようと思つたので、

「何うだえ？ あの子息を見す／＼嫌ひな大工で終らせるのは、まつたく惜しいものだ。思ひ切つて畫家にしてしまつては……。」と勧めても、父親の棟梁は、

「なアに、ちよつと器用に眞似をするだけの事ださア。とても畫家なんかになれや

「しませんやね。」と言つて肯かなかつたが、周藏が熱心に説いたので、遂ひには父親も其の氣になつて、

「俺の考へぢやア、とても駄目だと思ひますが、貴方がそれほど見込んで下さるなら、思ひ切つて然ういふことにして頂きます。何分宜しくお願い申します。」とあつた。

仍で周藏は、先づ石崎融思の門に入れた。

二 蘭を畫いては神技

あたかも其の頃、清人の江稼湖が初めて長崎に來た。鐵翁は直ぐに其の門に入つて、南宗の正風を學び、山水花鳥に巧みであつたが、殊に蘭竹を描いては、神技とまで賞め稱へられる様になつた。まつたく好きこそ物の上手なれで、周藏も世話し

甲斐があつたと、秘かに喜ぶし、父親も蔭ながら、伴の立身出直に北史笑むのであつた。

「蘭は花の中の賢人君子だ。常にこれを寫す事を樂みとする時は、則ち聖人君子を友にするに異らぬ。且つ其の眞意を了解するに至れば、胸襟自ら瀟洒として、心思安靜、俗塵を超越する事が出来る。云ふ迄もなく蘭は世に知られようと求めず、常に人知れぬ幽谷にあつて、馥郁たる香氣を放ち、其の心事の高潔、自ら求めずして世に賞せられるのは、蓋しこれあるがためぢや。古來氣韻を尙ぶ人の、好んで幽蘭を愛すのも、此故に外ならぬ。」と言つて、晝夜研鑽、些かも倦む事なく、ある時の如きは、知人の家の盆蘭を見て、賞翫措く能はず、これを寫生するために、殆んど寢食を忘れて没頭した事もあつた。處がそれがために、遂ひに病を得たほど

であつたが、それでも決して廢めなかつた。

鐵翁が病中の時に、一仙士が一莖の蘭を持つて來て、具さに其の形を示した後、これを授けらるゝとて、忽然として覺めたが、其の時初めて其の向背正側の法を覺つたと傳へられてゐる。

其の後二十年ばかり經つて、「禪道性圖畫」「有山堂蘭譜」が舶來したが、その書中には同じ様な法が載せてあつた。それを見て鐵翁は、不思議にも自分が悟り得た法と同一なのに驚いたといふ。

鐵翁は、稼圃の門に入ると間もなく、春徳寺に入つて落飾した。其の出家の動機は詳かにしないが、以來畫と禪を専修して、いよく其の三昧に悟入つた。初め鐵巖と號したのも、後に鐵翁と改めたのも、鐵舟禪師の畫蘭を最も喜び、其の爲人に

私淑したためだといふ邊から察するに、或ひは自ら高く標持して、浮世の塵を絶つためであつたかも知れぬ。

鐵舟は如何なる人物であつたかといふに、貞和年中の人で、夢想國師の衣鉢を承け、元に渡つて法を求め、傍ら水墨を學んで、能く祖師の像を描いた。其の畫趣は顔輝、牧溪に似て、風格最も高く、元の國王から圓通大師の稱號をさへ贈られ、歸朝の後には五山のひと數へらるゝ萬壽寺に住して、法務の傍ら畫を以て知られた。後嵯峨に入つて靜光院の開基となつた高德の僧であつた。

當時は、南畫全盛の時であつたので、其の風を學ぶ者あまたあつたが、多く畫論を斟酌して、單に模倣するに過ぎなかつたので、従つて傑出したものも見る事が出來なかつた。

此の中に、自ら彼の國人に親炙して、眞に其の本法を學び修めたのは、實に鐵翁が其の魁であつた。

三 自家に拘泥せぬ鐵翁

鐵翁は、常に其の身は西陲の避遠にあつて、京にも出なければ江戸にも出なかつたけれども、其の畫く所の蘭は、あたかも馥都たる芳香を放つが如く、四十歳の頃には、畫名は天下に響いて、彼の田能村竹田との初對面の時、

「君は處士にして董北苑、予は沙門にして巨然、縞素異ると雖も、前世は常に相從ふたのだ。」と言つたといふ。

また、鐵翁は次ぎの様な畫學の第一義諦を唱へて居た。

「畫を學ばんとするには、世に求むる心があつてはならぬ。毀譽によつて志を

撓ませてはならぬ。此の二つを座右の銘とする事が肝要ぢや。併し口にいふだけは何でもないが、徹底して實行する事は容易でない。眞に徹底せんとするには、先づ胸中に一點の俗氣をも留めず、而してよく修練する時は、心手自然に圓熟して、知らず知らずのうちに妙所に達する事が出する。これが即ち明來つて暗去るの道理ぢや。苟くも至誠があれば、君臣父母兄弟、總ての交はりも皆直理に適ふが、若し之れに反する時は、たとへ碩學智識の士と雖も、其説は行はれるものでない。されば丹青に志す者も亦、其心を至誠に致し、專一に修練して、運筆熟、世に上手と云はれる様になつても、汰して慢心を生ずる事なく、所謂悟後復一の要語をよく々々玩味し、自ら省みて、必ず邪心を防ぐ様に努めねばならぬ。」

と、鐵翁は入門の志願者にも、筆墨以外に、先づ心田の開拓が必要だと力説するの
 だつた。

稼圃が歸國してからも、弟の芸閣は尙ほ長崎に残つてゐて、文墨雅會の牛耳を執
 つて居つたが、相往來するものは、多くは來舶の清國人、目に觸るゝものは、概ね
 南宗本派の畫、而して世を擧げて、南宗を畫の上乗となし、それでなければ畫でな
 いと迄云ひたるの時に當つて、鐵翁のみは南畫の典型を學びながら、それ等亞流者
 に超然として居つた。そして決して自家に拘泥する事なく、多くの人が願みない北
 宗の畫に對しても、其の長と信する所は之れを讚ふるに吝がならず、門人に向つて
 も、「風の南北に拘ばらず、自ら一悟を得た者の畫は、必ず何處かに優れたところが
 あるものであるから、人と作を見て、決して流派の別を論ずるには及ばぬ。人と作

の優れたものは、皆な名家と云ふべきである。然るに世には、己れが南方の流を汲
 んで居るからとて、一も二もなく北方を排斥するやうな者は、自らまだ眞の畫理に
 明かならぬ事を示すもので、愧づべき事ぢや。恥かしい事ぢや。」と説いて居た。

頼山陽の歿後、京都藝苑の主盟として推されたのは貫名海屋であつた。海屋は書
 畫共に堪能で、諸家の畫論畫譜に通曉して居たが、而かも鐵翁の門を叩いて、稼圃
 の口訣、並びに其の自悟した處に聽從した。

日根對山は、自ら南畫の泰斗を以て任じ、常に高く標持して、あらゆる畫家を片
 つ端がら罵倒して居たが、獨り鐵翁に對しては、流石に頭が上らず、誠を盡して其
 の教へを乞ふたほどである。

その他京都の中西耕石、前田半田、大阪の金子雪操、江戸の安田老山、老山の妻

紅楓女史などをはじめ、苟くも南宗の畫を學ばんとする者は、競ふてばるゝ長崎に下り、春徳寺の門を叩いて、鐵翁の畫論を傾聴した。

四 鐵翁と若侍

或る時であつた。春徳寺の寮を訪れた一人の若侍があつた。

「手前は筑後久留米の藩士でござりますが、老和尚にお目通りを願ひ、丹青の道を御教授に預りたく罷り越した者でござりまする。どおか宜しく御取り次ぎ下さるやう。」と申し入れた。

取り次ぎに出たのは、澗泉といふ弟子であつた。

「左様でございますか、暫らくお待ち下さい。」と、奥に入つたが、間もなく出て來て、

「御來意を師匠に傳へましたところ、貴方は畫を以て御主君へ御奉公なさる方であるかどうかを承はつて來いといふ事でした。」「否や、手前の家は固より畫家ではござらぬが、主人有馬中務大輔、豫ねて老和尚の高徳をお慕ひ申し、特に手前を遣はして、學法を學び参れとの上意、實は主命によつて参上仕りました。」
 「左様でございますか。どうかお待ちを……。」と言つて、澗泉は再び奥へ入つて行つた。と直ぐに引つ返して來て、

「折角の仰せではござりますが、師匠の申しまするには、此の頃老病のため、御意に従ひかねますとのこと、何卒悪しからず思召し下さる様、私よりお願申しまする。」「それは近頃残念至極、なれども御病氣とあれば致し方がござらぬ。然らば主人への土産、かねて老和尚の得意とせらるゝ、蘭の一幅を頂戴致して歸りたうム

りまするが、此の儀狂けてお聞き濟みに預りたう存じまする。「思召は忝なふござりまするが、病中の事とて筆を執る事も氣が進みませぬ故……。」では御病室を御見舞い申し、一目なりとも拜顔の榮を得て、主人への申し譯に致したうござりまする。」

それもならぬとも言ひかねて、澗泉は奥へ入つて行つたが、直ぐ出て來た。而し其の氣の毒さうな顔を見たばかりでも、それも駄目だといふ事は讀むことが出來た。

「御意のほどを師匠に傳へましたところ、何分にも取り亂して居りますれば、かゝる穢いところへお通りは却つて迷惑故、何事もお呆らめを願ひ、御引き取り下さる様とのことござりまする。」「いや、それ程までに仰しやるものを、此の上強いて

とお願ひ致すも失禮でござれば、何れまた改めて御伺ひ致しまする。何卒老和尚によろしく……。と、若侍は悄悄として立ち去つた。澗泉は氣の毒さうに其後姿を見送つてゐた。

其の後も、此の久留米の若侍は、度々春徳寺を訪れたが、鐵翁は頑として應じなかつた。何時も玄關拂を喰はした。それでも若侍は決して懲りる色もなく、根氣よく通つて居たが、或の朝の事、而かも鐵翁が起床する處を垣間見て、俄かに玄關から案内を乞ふた。

「御病氣と承はつて居りましたが、只今あれにてちらとお見受け申しますれば、最早や御床拂ひの御容子、是非とも一度お目通りが願ひ度ふござりまする。」と申し込んだ。取り次ぎに出たのは、矢張り澗泉であつた。奥へ入つて行つた澗泉は、直

ぐに出て来た。

「如何にも床は離れましたなれども、まだどなたへも御面會は望ましくないと申されまする。毎度の御越しに、まことにお氣の毒に存じまするが……。」

滯泉は如何にも氣の毒に堪へぬ風に言つた。

「それでは、またお逢ひ下さらぬか。はてさて残念な、就いてはこれなる一章、甚だ拙ない作ではござりますが、誠をこめてはござりまする。せめては之へ御昌和を願ひたう存じます。」と言つて、懐中から一片の詩箋を取り出して渡した。

滯泉がそれを鐵翁の許へ持つて來ると、鐵翁は之れに一瞥を與へただけで、

「老僧元來無學にして、詩歌俳諧一つも解する能はずと言へ。」と言つた。滯泉はいよく氣の毒になつたが、傳へぬ譯には行かないので、若侍に斯くと告げると、

遺がの若侍も憤然として面を變じた。

五 若侍を訓戒

「何と言はるゝ、鐵翁何程の者なれば、左様に拙者を侮辱なさるか、聞き傳へて其の高徳を慕へばこそ、態々遠路此の地に罷り越し、訪づれし事も最早や五六度ではござらぬか、それも私用ならば兎も角も、主を持つ身の主命を大切と思へばこそ、如何なる耻辱をも忍び、禮を盡して參るものを、拙者の願ひは一つとして容れられず、誠に今日見受けるところによれば、其の起居動作は、何の異なる風もなく、病人らしい處は些かも見えぬ。それに尙ほ面會を拒まるゝは、治體如何なる故あつてでござる。次第によつては刀の手前、主君への申譯、拙者も此の儘には濟まされぬ。」と、早くも腰なる刀に手をかけた。

年若な滯泉は、ブル／＼慄えながら奥へ逃げ込んだが、鐵翁に斯くと告げる事が出来ないで、同門の煌園といふ者に頼んで、師匠鐵翁に告げて貰つた。

鐵翁は自若として、面色一つ變じない。徐かに白髯を撫しながら聞いてゐるが、聞き終ると、冷かに笑つた。

「ふゝ、老僧固より畫師ではない。併し些か其の道を心得ては居る。己れの知る處を入に傳へる事を、決して藝客みをするものではないが、今強ての望みを斷はつて、面會をさへ辭するのは、別に所存があつての事ぢや。何故かといふに、一體今の時勢はどんな時勢ぢやと思ふ。内には公武の間愈々疎く、外には夷狄の憂があるではないか。苟くも武士として碌を食む者は、各自武を練る事に、日も尙は足らぬ有様でなければならぬ。日頃畫筆を舐めて渡世する者でさへ、皇國の爲には筆を投げて

劍を執るのぢや。此の天下多時の秋にあたつて、大小を佩む武士でありながら、却つて劍を棄て、筆を執るとは以ての外の心得違ひぢや。然ういふ不忠不義の武士は、鐵翁は顔を見るのさへ厭はしいことぢや。刀の手前といふ以上は、此の俺を斬らうといふのぢやらう。はゝゝゝそれも面白い。人間既に古稀を超えて、何ぞ命が惜しからう。苦しうない、斬るなら存分に斬られよう。」

若侍は黙々として聞いて居た。鐵翁は又語をつゞけて、

「どうぢや、判つたかよ。耳があるならよう聽かつしやれ。刀を以て斬るときは、俺の首は瓜か太根の様に、容易く斬れようが、如何なる力を以てしても、俺の蘭は得られぬぞ。」

若侍は夢からでも覺めたものゝ様に、思はず掴んでゐた刀の柄を放すと、ピタ

りと玄關に跪坐づいた。

「恐れ入りました。拙者重ての不心得でござりました。あゝ、面目次第もござりませぬ。主君が斯くと命じましたならば、それを諫言して止むるが當然でござりまするに、性々として命を受けて参りましたは、皆な拙者の愚鈍、立ち歸つて主君に申し傳へましたならば、主君も定めて懇望の蘭を頂戴いたしたよりも、嬉しく思ふに相違ござりませぬ。只今の有り難い御教訓は、肝に銘じて決して忘却は致しませぬ。」と、平蜘蛛のやうになつて謝罪つた。

若侍はかうして立ち去つたが、鐵翁は此の若侍を戒めたばかりでなく、盡などを描いてゐる時ではないと、己れも亦筆硯を遠ざかつて、他よりの需めなども一切断はり、門を閉して靜かに餘生を送つた。それは慶應二年の頃の事だつた。

此の一事でも、鐵翁が決して普通の禪坊子でなく、世に曰ふ畫の名人などと、其の選を異にして居た事を明らかに知る事が出来るのである。

六 門弟の解放と入寂

「俺はもう八十になつた。」と言つて、或る時門弟を集めて、其の前途を諭すとき先づ斯う言つた鐵翁は、皺だらけの兩眼をしばたいた。

「八十になつても九十になつても、自分では丈夫な積りぢやが、いやはや年といふものは手はれないもので、近頃ではもう氣力も衰へるし、筆を執る事さへも憚い。愈々俺もお前達と別れねばならぬ時が來た。若い者の進む道は前にある、取り残された老耄に氣を兼ねて、決して後退りをしてはならぬ。今日からは各自己れの信ずる所に向つて、畫法の妙諦を悟り、己れの新機軸を出して、名を後の世に揚げる事

に、一層精進が大切ぢやぞ。」と言つて、門下の解散を命じた。

門弟たちは、此の不意の宣告に吃驚した。中には何か言ひ出さうとせるものがあるのを、鐵翁は靜かに抑へながら、

「昔は青蓮院の御門主、其の書法の弟子達に、菊の實植ゑの例へを引かれて、各々一風を興す事を併せ付けられた。近衛三貌院、光悅、松花堂、寛永の三筆はこれによつて生れた。固より俺に然ういふ徳もなければ、亦力とてもないが、同じ道理に二つは無い筈、書道に於ても、光琳、一蝶、皆な狩野の門から出て、別に一種の寫意を自得して、其の風は今に珍重される、近くは浪華の岡田半江、初學の時より父の米山人に就て、よく南畫の上乗を悟るに及び、其の體一變して父の上に出で、儼然たる一大家となつた。これぞ云々に謂ゆる、師學短を棄つるの遺訓に適ふたもの

ぢや。お前達も此意を心として、老耄の俺に遠慮は要らぬ。もう手解きの濟んだ上は、自分の技は自分で磨き、一日も早く自家の風をなして、立派なものになる様、專一に心懸けて呉れ。これが錢別ぢや。復び未練を残してはならぬぞよ。」

かうして、門弟一同を解放して、悠々自適の身になつた鐵翁は、「爐屏」と題して一文を認めた。

正にして天理に通じ、慈悲を以てよく人に施す、無欲にして足る事を知る、平日行事正しくして邪なく、物を愛して執せず、俗塵凡情一點もなき、之を古人の風流と謂ふ、世の雅人、今時一人もある事なし、故に門を閉ぢて人の來訪を許さず、我が徳名の高きなし、高名を願はず、適意に養ふに拙を以てし、天然を了せんと欲するのみ、我人の師とならず、人我を學ぶは即ち狂人なり、人

我が狂を學んで我が心を學ばざるが故なり。云々。

南宗の妙諦を極め、講名天下に鳴つた鐵翁の眞面目は、寧ろ此の方面にあつたのだつた。

鐵翁は明治維新の後四年、八十一歳の高齡を以て、師走七日、春徳院の寮に溘焉として入寂した。

明治畫壇の巨擘として、其の名を轟がした瀧和亭も、實に鐵翁の門下であつたのであつた。

望月三英

一 天下二名醫の一人

三英は丸龜の藩醫雷山の子で、字は君彦、鹿門と號し、三英は其の通稱であつたが、其の一族で、幕府に仕へた望月元椿が死去の後、其の家に入つて元椿の後を嗣ぎ、藩醫から侍醫に進んで法眼に叙せられた。三英が最も巧みなのは瘡を治す事であつた。瘡だと言へば、百に一つも過つた事がなかつたので、忽ち其の名は喧傳せられて、其の頃京都で有名であつた吉益東洞と共に、天下二名醫として稱へられて居つた。

洋の東西、時の古今を論せず、醫師の天狗は通り相場であるが、彼も其の選に洩

れず、療治の談が出る毎に、

「近頃不思議な醫師がある相ぢや。口を開くと周漢の法を説くけれど、術を見ると張子和の悪流ぢや。双物を以て人間の軀を玩具にするとは奇怪至極ぢや。斯う云ふ醫者にかゝつて死ぬる位なら、溝に轉け込んで死んだ方が、何の位優しか知れぬテ」と云ふのが口癖であつた。それは云ふ迄もなく、外科の出であるところの東洞を、それとなく誇るのであつた。

彼は天狗には天狗だか、幕府の醫官、江戸隨一の名醫であつた。其の玄關に、或る日の事恐るる立つた男があつた。

「お頼み申します。お頼み申します。」

一人の門弟は、肩をそびやかして出て来た。

「何だ。何れから参られた？」「はい。私は市川團十郎(二世)の弟子で、和十郎と申す者でございますが、此度師匠大病につきまして、是非先生のお力にお頼り申したいと存じ、實は態々罷り出でましてござりまする。どうか宜しくお取り次ぎ下さるやう。」「團十郎、河原者が、大病とあらば、先生のお治療を願ひに來たのであらうが、恐れ多くも將軍家の御脈を伺ふ先生、とても河原者の見舞いは叶ふまいぞ。」取次ぎの答へは、ぞんざいであつた。けれども和十郎は、師匠の生死の境とあつて一生懸命であつた。

「いや、その儀も實はよう存じて参りました。併しこれにはいろ／＼と譯のある事でございますして、お目通りさへ願へれば、私から先生に申し上げます。就きましては、實は市ヶ谷のお旗本渡邊様のお隠居のお手紙も頂いて参つて居りまする。」「な

に、渡邊様の添書を持参いたして居るといふのか、そんならさうと早く言へばよいのに、どれ／＼、其の手紙と云ふのを出すが宜い。」

取次ぎも添書があるといふので、前よりも優しく言つた。

「はい、これでござりまする。」

和十郎は、大切に懐中して来た手紙を出した。

「暫く待ちなさい。」と言ひつゝ、取り次ぎは奥へ入つた。和十郎は吻と息を吐いた。其の手紙さへ見て呉れば、大丈夫だといふ自信が、和十郎には充分にあつた。

間もなく取次ぎが出て来て、

「先生が逢はうと仰しやるから、此方へ上らつしやい。」

三英の前へ出た和十郎は、平蜘蛛のやうになつて禮をして話し出した。

「私は只今も申し入れました通り、團十郎の弟子の和十郎と申す者でござりまするが、師匠の團十郎事、四月二十一日から病氣になりました、母御の榮光尼を始め、一門の心痛一方ならず、榮光尼は近江の多賀明神へ、身を以て命に代らんことを祈られまするし、私は一家の守り本尊とも云ふべき成田の不動尊へ、三七日の参籠を致しまして、一心不亂に師匠の病氣を快を祈りました。先生、どうぞお聞き下さい。恰度三七日の結願の夜の事でござりました。私がお籠りを致して居りますると、いつとはなしに眠りまして、とろ／＼と致しましたが不思議な夢を見ました。」と語を切つた。

「ふむ。弟子なればこそ師の爲めに、三七日の参籠、頼まれても出来ぬ事ぢや。して何の様、夢を見たのぢや。」「左様でございます。不動様が私に三つの英を賜はり

ましたが、それと同時に師匠の病氣が拭つた様に全快致した夢でござりました。」
 「ふむ。」それで歸つて早速其の事を話しますと、渡邊様の御隠居が、常に師匠を
 一方ならず最負にして居て下さいますので、其處に來合せて居らつしやいました、
 それこそ當時天下にかくれの無い、恐れ多くも將軍様のお脈を伺はるゝ三英先生の
 御療治を受けよといふお告げに違ひないと仰いましたので、身分柄をも執へませ
 ず、御隠居様のお手紙をいただいて、斯くは御願ひに罷り出でた様な次第でござり
 ます。先生、師匠一人の命は一門の命でござります。どうか憐れと思召して、
 御見舞ひ下されませうならば、師弟生々世々御恩は忘却いたしませぬ。」
 師を思ふ一心の和十郎、其の言葉には真心が溢れて居つた。其の双の眼からは、
 涙がはらはらと流れた。

和十郎は涙に濡れた眼で、返事や如何にと、三英の顔を恐る恐る見上げた。
 それは早保二十年五月も末の事であつた。

二 醫は仁術である

「靈夢は兎も角も、俺はお前の其の師を思ふ熱心に動かされた。宜しい、見舞つて
 やらう。」

三英は快諾した。和十郎は敬獻て喜んだ。三英は團十郎の病を見舞つたか、其の
 甲斐あつて、一時危篤を傳へられた病氣も、あたかも薄紙でも剥ぐやうに快力に赴
 むいて、其の年の八月二十九日には、三英を主賓として、渡邊の隠居も招いて、床
 上の祝宴を開いた。本人の團十郎は勿論、一家一門の悦びは、蓋し譬へるものかな
 い程であつた。

團十郎は其の頃人形町に住んで居つたが、其の家は間口が十軒、俗に千兩屋敷と稱されて居つた。團十郎は病氣が全快すると、其の千兩屋敷を賣り拂つて、三英への謝禮と、祈願をかけた神社佛閣へ、禮詣りの費用に、一文残らず費して了つた。それは團十郎が命の親を重んじてのためであつたのだ。

此の事があつてからは、團十郎の氣前も揚つたが、三英の神枝も亦世に益々稱へられた。其の半面にはまた、三英が團十郎の病氣を全快させたために、法外もない謝禮を取つたといふ様な風評を傳へるものもあつた。何れの時の如何なる者にも、蓋し毀譽褒貶は免かれない事であつた。

或る時であつた。柳營の詰所に、醫官が大勢集つて居た。其處へ些か遅れて入つて來た。すると山田圖南法眼が、嘲けるやうな微笑を洩しながら、

「三英殿、御身は近頃團十郎と申す河原ものゝ療治を爲された相ぢやが、恐れ多くも上様のお脈を拜見する御身でありながら、あまりに輕々しい事ではござらぬか。」と言つた。

「我等のたづさはる醫は仁術でござる。假へ路傍に倒れた乞食非人たりとも、病と見れば藥を與へるのが務めてござる。それが判らぬやうな貴公方なら、宜しく醫を廢めたがよからう。」と事もなげに言つてのけて、却つて嘲けり返すやうな笑みを洩らした。勿論、三英の神術と名聲を羨んで、何とかして恥を與へようと思つて居る連中ばかりであつたが、三英の此の一言には、山田圖南も二の句が亞げなかつた。

三英は「醫官玄稿」を著はして、運氣の妾を辯じ、時の醫者の殆んど凡べてが言ふ所の、古法今病を治せずとの説を駁して、専ら古法の題彰につとめた。そして後世

の所謂折衷派の開祖と仰がるゝに至つた。尤も三英は、古法にのみ偏せず、博く見て要を摘み、とつて以て應用して、之れを古法と鹽梅したのだつた。

三英は稀代の博覽を以て開いて居たが、尙ほ嫌ずとなし、

「吾れに海内の醫書の悉くを得させ、之を讀ましめたならば、此上の快事はない。」と常に嘆じて居つた。將軍吉宗は之れを聞いて、或る時三英を召して、

「君彦、其方は日本中の方書を悉く讀みたいと申すさうぢやの。」「上聞に達しまして恐れ入り奉りますな。」「どうぢや。海内の書だけで満足ぢやと申すか。」「欲には限りがござりませぬと、舶來の書までは、逆も力が及びませぬ。」「左様か、可し可し。」と、其の場は其の儘終つたが、間もなく將軍は、命を傳へて方書を自由に校せしめた。其の上尙ほ官費で舶來の方書を好む儘に購讀せしめた。三英の該博は、事

實上天下に敵するものがない様になつた。

三英はまた文學を好み、服部南郭の門に學んで、文學の方面に於ても重きを爲して居つた。

「醫者だからと云つて、書を能くせぬでも可いと云ふ事はない。昔の名醫には能筆者が多かつたが、數十年來頓と絶えた。術も亦書と共に衰へたのは歎かましい次第ぢや。」と常に嘆つて居つた。そして暇さへあれば硯を引きよせて、老後に及ぶまでも習字を怠らなかつた。

明六年十一月四日歿つたが、其の年は詳らかでない。併し七十歳位であつたらうといふ事は、種々の點から察することが出来る。遺骸は淺草新堀壽松院に葬むつた。

三英の著書には、前に挙げた「醫官立稿」の外に、「醫門多疾」「三世方」「明醫小史」「玄餘草」「焚餘小集」「勸醫抄」「醫學五剛」「疲瘡神方」などがある。

松平不味

一 來客を驚かす馬鹿囃

「不味」とは出雲侯松平直政の子、從四位左近衛權少將出羽守治郷の號である。松平に於て十八萬石、而かも徳川の御家門であつたが、たしかに大名中の奇人を以て目されて居つた。

口さがない京童は、出羽の道樂殿様とまで呼んで居つた位、至つて下情に通じて居つた。金の勘定も知らぬやうな、所謂殿様式の殿様ではなかつたといふ事はたしかである。不味侯は其の愛妾三人の、美しい雪の様な肌はだに文身をさして、馬鹿囃ばかばやしを學まなばせた。さうした來客らいきゃくでもあると、太鼓たいこにび太鼓たいことを持ち出して、笛ふえは不味侯

の役、鐘ば近侍の役、太鼓は愛妾共の役割りで、「ステテンテン、ドン／＼、スカチヤンチヤン、オピー／＼テケテンテン」と囃し立て、來客を呼と驚かすのであつた。

此の位の殿であるから、天下の奇人變入を愛して居たのは勿論であるが、其のうちでも十返舎一九は殊の外愛されて居つた。隱居の後は宗納又は一々齋、一閑子などと號して、半寸庵光琢に茶道を學んだが、遂ひにこれに達して石洲流不味派の一派を成した。

文政元年四月二十四日、年六十八で卒した。遺骸は西久保天徳寺に葬つた。

清水赤城

一 白川樂翁を盲者扱ひ

清水赤城は、名は政徳、字は俊平、通稱を俊藏と呼んで、近藤重藏、平山甲藏と共に、併せて天下三藏の一人であつた。赤城の號は上洲赤城に生れたので、其の郷名を取つたのだつた。他に淡庵（遷庵とも云ふ）、虚舟、正氣堂の號があつた。

赤城は幼時から劍術を好み、長沼流の兵學を修めて、夙に郷黨の畏敬する處となつた。一説には九歳の時父に従ふて江戸に出で、十三歳の時富田大峰の塾に入つたが、學術に怪疑を懷いて辭し去つて、それよりは常に師を取らなかつたとも傳へられて居る。何れにしても、世間文儒の所爲を蛇蝎視してゐた事は争はれない事實で

ある。それがためには早くから自立して實學を講じ、また専門家について天文、曆數、兵法、槍劍を學び、砲術を齋藤庄兵衛に學び、各々印可を得、殊に砲術を好んで、當今戰陣の急務は銃砲火器にありと、諸火を研究して火砲要録八卷を著はした程であつた。

赤城は飯田町に塾を開ひて、兵馬の子弟を養成してゐるが、當時士氣全く頹廢してゐた時代であつたが、一面また反動的に、時流の漂奪を鞭撻して、士氣の振興を唱ふるものが續出して、漸く情弱の夢から覺めようといふ氣運が向いて來たので、赤城の兵學塾は、其の名聲忽ち府内に響いて、其の門下からは幾多の俊髦が響を列べて輩出した。赤城の綽名を大丈夫と呼んだ。それは常に孟子の「富貴不能淫、貧賤不能移、威武不能屈」の三句を終生躬行の標本として居にからである。けれども此の名聲噴々たる兵學者の勝子元は、何時も何時も不如意勝ちで、火の車は絶えず廻つて居つた。

ある日の事であつた。赤城は白河樂翁侯に召されて、其の目通りへ罷り出た。

「其方が赤城か。噂は豫て聞き及んでゐる。然し其方は是れ迄諸家より度々召抱へる話があつても、皆斷はつて應ぜぬといふ事ぢやが、それには何ぞ仔細でもあることか。」と訊いた。

「否、別に仔細としては有りませぬ。手前の學問は賣り物ではござりませぬで……」
 「ならばどうぢや、扶持の爲めでたく、賓師の禮を以て迎へたならば……。」
 「それは士の面目でござりませう。願はくば其の様な主人にぶつ突りたいものであります。併しながら考へて見れば、世の中には實に情けない武士もあるものではござり

ませぬか。「ほう、情けない武士ぢやと云ふと……。」「されば、拙者只今これへ参りまする途中、長棒の駕に乗つて参るものがござりまする。駕勝には堂々たる武士が、高股立を取つて附き随ふて居りますので、主人は如何なる御仁かと見れば、これはまた思ひの外の檢校では△りませぬか。苟くも武士と生れて、盲人の家來になるなどとは、何う考へても實に情なき武士でござる。」と言ひ放つたので、流石の樂翁侯も二の句が亞けなかつた。で、終ひに其の儘物別れになつたが、後で樂翁侯は、近習に向いて、

「俊藏は實に酷い奴ぢや。予を盲者に致し居つた。」と苦笑した。

二 一撃で斃した鐘愛の狎

赤城は或る時、藤堂和泉守から五百石の祿高を以て迎へるといふ事であつたが、

「食祿の毒は鳩よりも恐ろしい。我等一身は兎もあれ、子孫が皆これに中られて天下の痴者となる時は、我家ばかりでなく、實に天下の大損ぢや。」と言つて應じなかつた。

曾て、また蝦夷地お雇與力の内命を受けた時も、赤城は何處までも固辭して、其の朋友を推舉した。赤城の眼中には、俸祿などは殆んど土芥に等しかつたのだ。そして赤貧洗ふが如き中に晏如として、武を練る事を唯一の楽しみとした。

けれども赤城は、武一片の男ではなかつた。儒雅ともに精通して、藏書實に二萬卷、悉くこれを讀破して、其の博覽強記は、當時の交友間に於ても、恐らく赤城の右に出づるものはなかつた。

狷介孤峭、濫りに交はらなかつたが、交遊には各方面の名流を網羅して居つた。

大窪詩佛、瀧澤馬琴、市河寛齋、渡邊華山、石田醒齋、佐藤一齋、蒲生君平、藤出幽谷などは、其の重なるものであつた。

赤城は和歌にも長じてゐたが、常に「萬葉集」は我國の詩經だと云つて、熱讀反覆、殆んど全篇を誦んじて居つた。家では折々同交の友を集めて詩歌の小集などを催ふした。

貧乏は日に日に加はつた。けれども決して貧乏の前に膝を折らなかつた。強情は依然として變る事がなかつた。

或る時であつた。某侯の講筵に招かれた時、豫ねて殿が鐘愛する一匹の狎があつたが、それがのこくと其の席へ現はれた。殿は何の氣なしに赤城の講義を聞きながら、片手で狎の頭を撫でた。赤城はそれを見て憤とした。と、やがて其の狎は、

赤城の側へやつて來た。待ちかまへて居た赤城は、扇子をあげて一擲を喰はしたが、狎はころりと斃れて了つた。赤城は斃れた狎には眼も呉れず、平然として講義をつづけた。殿も一言の文句を言ふ隙もなかつた。

三 寒中の水泳

天下三藏の一人と云はれた、平山甲藏の子龍と共に、兩國の雪見と洒落込んだ事があつた。すると子龍は、

「どうだ。寒中の水泳も講義の一つぢや。やつて見る氣は無いか。」と言つた。

子龍の方では、如何に赤城でもどうだかと危むでゐたが、

「よしつ、やらう。」

赤城は言下に賛成した。兩人は忽ち衣類袴を脱ぎ棄て、飛沫も凍る寒流を目が

けて洵然と飛び込んだ。

橋の上を通つてゐた人々は、呀と叫んで眺め入つた。見てゐるものの方が身を震はせて居るのに、當人兩人は抜手を切つて井び泳いだ。兩人は首尾よく向ふ海岸に着くと、一と廻りして今度は上流から再び元の處へ歸り、別に疲れた風もなく、悠々と身體を拭いて衣服を着てあるき出した。見てゐた人々は肝を潰して胴震ひした。

「どうだ。快い氣持だつたな。」と赤城が言ふと、

「うむ。水の中にある時は然うでもなかつたが、陸にあがると寒い。」「はゝゝゝゝ貴公から言ひ出して、今更ら弱音を吐くな。」「否や弱音を吐く譯ぢやない。」「おいおい見つとも無い。貴公は顛へてゐるではないか。」「何に、これは武者顛ひだ。」

何れ劣らぬ負けじ魂の有ち主であつた。やがてとある酒屋の前に差しかかるゝと、氣と酒の香が鼻を撲つた。すると子龍の方が兜を脱いで、

「これを見、此の香を嗅いで堪らぬ。熱爛で一杯やつて行かうではないか。」「不可ぬ。陣中に酒は禁制だ。」「ちえッ、口惜しいが今日は俺が負けて置く。」

此の様に親交のあつた子龍とも、後には意見の衝突から交はりを斷つた。假へ同じ道を歩いても、子龍の急進論と、赤城の漸進論とは、到底一緒のものではなかつた。

また、山本北山とも儒雅の交はりを結んだが、これまた北山に言行不一致の廉がある云つて絶交して了つた。

斯ういふ強情な赤城で、嘉永元年二月、脚氣を患ひ、顛躓することが屢々であつ

た。そして自ら終焉の近づいたのを知つて、家族のものや知己の勧めを斥けて、藥餌を服用せず、同年五月十日端然として逝つた。行年八十三。

赤城には惣領榮吉(礪洲)次男次郎(一方)三男順藏(訥庵)四男松藏(存軒)女ふんといふ五人の子があつた。また其の門人としては齋藤彌九郎、安井息軒、安積良齋、齋藤拙堂、佐藤椿園、菊地容齋などは其の重なるものであつた。

小西來山

一 土人形の娘

小西東山、それはかの「人形の記」を作つて、

折る事も高嶺の花や見たばかり

と吟んだ有名な大阪の俳人である。

來山は小西行長の苗裔で、明暦元年泉州堺に生れた。けれども不幸にも幼少の時父母を亡なつたので、大阪道修町小西某といふ藥種商が、其の親戚なところから、其家に引きとられて育てられる事になつた。

ところが、來山は其の性質敏く、殊に書を讀むことが何よりも好きであつた。そ

して算數といふやうな、商人に必要なことは至つて不器用、否な頭からやつて見ようともしなかつたのだ。

そこで、かねて主人と懇意にして、此の家へ出入りをして居た俳人に、前川由平(自入)が見て、迎も商人になる子供ではない「寧ろ自分の弟子にしようと云ふので、主人にも其の事を話して自分の門弟の一人に加へた。

主人は好まなかつたが、本人は非常に悦んだ。扱て師の自入は來山を引き取つて教へて見ると、一を聞いて十を悟る、天性の顯悟、其の技もめきくと上達して、まだ二十歳にも満たぬ頃から、天晴れ一廉の宗匠になつて、十萬堂又は湛々翁と號して居つた。

來山は酒飲みであつた。其の息に酒の香の無いことはなかつた。平野町に住んで

居たが、妻もなければ世帯道具もなく、洗ふやうな赤貧の中に起臥して、酒ばかり呷つて居つた。

門人はやつて来る、門人の外にもう一人相手があつた。それは何處から購めて來たのか、土の女人形の娘だつた。來山のためには、此の物も言はぬ冷たい女人形が何よりの話相手だつたのだ。

「湯ものまぬは心憂けれど、さかしげに物喰はぬはよし、舅はいづこの土工ぞや、あまうつゝの妹背物語や。」

とは、來山の女人形の記の一節である。

「どうぢや。一盞參らぬか、飲まずば酌とも言ひたい處ぢやが、いつも美しい顔を、從順しう坐つておるや、淋しいか、は、、、、、其女とかうして一所に棲

むやうになつてから、もう何年になるが、泣いた顔一度見せた事もなく、腹立てた事もなく、何時も笑ひたげな顔しておるや、さりとて聲を上げて笑ふた事もない……どうぢや、飲まぬか、酌せぬか、は、は、は、其女は何時までも若うおるや、わしはこれもう六十過ぎて、此の通り、姿も心も老ひ朽ちた。ああ、其女の其の若々しい姿が羨やましいぞ。」

來山は手酌で飲みながら、傍の人形を淋し氣に見やつた。

二世に拗ねた來山

今宮は蟲どころなり聾なり

これは世に拗ねた來山の句であつた。門弟と土の女人形を相手に來る日も來る日も酒と句三味に日を送つて居た。正月が來ようと盆が來ようと、一向氣にかけなかつた。

つた。或る年などは、もう大晦日だといふのに、餅一つ搗かなかつた。搗かうとも思はなかつたが、また搗ぐにしても金がなかつた。仍で門人たちは氣の毒だといふ處から、一同申し合せて、元朝の雜煮の餅に、料理までも揃へて持つて來て呉れた。

「いや、これは近頃忝けない。二三日酒浸りになつて、空腹を覺えて居たところぢや、恰度良い。遠慮は何とやら、早速頂戴仕らう。」と、門弟どもの心づくしの重詰めの馳走を、眼の前で開いて、元朝のものにと云つて持つて來たものを、忽ちむしやくと喰ひはじめたのには、遺がの門人たちも呆れて口が利けなかつた。

「これはどうして、なか／＼結構な御料理、お蔭で命拾ひをしたといふもの、は、は、は、どうぢやな。一句浮んだか。」と言ひつゝ、筆をとつてスラ／＼と認めて示

したっ

我春は宵にしまふてのけにけり

三 振つた辭世

或る夜の事であつた。酒に酔つて快い氣持になつた來山は、ふらりと表に出たが、もう町家は何れも寝しづまつて、三更も過ぎて居つた。其の夜は星は降る様に輝き、月も隈なく照り渡つて、あたりが静かだけに、町中でさへも蟲の音が聽かれた。醉顏に吹く夜風は何とも言へなかつた。來山は表に出ても、何處へといふ的はなかつた。只だ足の向くまゝに歩いて居た。

「待てッ、今頃何者ぢや。」

とある横町から、來山の鼻の先きにニユツと現はれて、斯く誰何した大きな男が

あつた。來山は驚きもせず、

「何者でもない。人間ぢや。」と言ひながら、足もとめなかつた。

「待てッ、人間は言はずと判つて居る。世間も寢靜まつた此の夜更に、何れに何用あつて行くものぢや。」「用もない。的もない。唯だ歩いて居るだけぢや。」「用もない。的もない。」と、來山が言つたことを小聲で言つて、ジロジロと睨みつけて居たが、

「見れば風體と言ひ、言ひ草と言ひ、怪しい奴ぢや。吟味致す筋がある。神妙に隨いて參れ。」「よろしい、何處へでも參じませう。」「途中で逃げかくれ致すと、其の方の爲めに相成らんぞ。」「はゝゝゝ何、其の御念には及ばぬ。別に要もない身體ぢや。何處へ伴れて行かれるか知らぬが、閑つぶし、退屈しのぎに恰度よいわい。」

來山は平氣で番所に伴はれて行つた。其處で身許姓名などを問はれたが、來山はそれを名乗らなかつた。

「澁太、奴ぢや。」とあつて、其の儘牢獄に投ぜられて了つた。

來山の平野町の住居では、夜中に主人が出たなり、二三日経つても歸つて來ないので、門弟どもは心配して、心當りなどを探ねて見たが更らに手懸りが無い。牢獄で澄まし込んで居る來山であるから、固より知れよう筈がない。仍で、止むを得ず其の筋へ今日で言へば保護願ひといふやうなものを出した。それではじめて來山の身許が知れて、門弟どもに引き渡されたが、牢獄から放されたからと言つて、來山は嬉しいやうな顔もしなかつた。

「朝夕の寒さが追々と加はる頃でございますから、定めてお辛かつた事でございよ

せう。」

門弟どもは集つて來山を慰めた。

「朝寒夕寒は何でもないが、唯だ酒のないのは閉口した哩。其の代り、自炊をする面倒がなくて、暢氣であつた。はムムム。」

如何にも無頓着に言つたのには、門弟たちも二の句が亞けなかつた。來山の虚心は、若い時分から既に老域に入つてゐた。

晩年は今宮に幽栖して、草庵を十萬堂と名づけ、名物の蟲の聲と、鐘愛の人形娘とを相手にして清貧を楽しんだ。

來山は何時如何なる時でも、決して筆を擇ぶといふことなく、人に需められて書くときも、有り合せの秃筆で間に合はせて居た。併し其の手蹟は天晴れ俗流を抜ん

でて居た。

或る時、筍の畫讃を求めた人があつた。

「其ものを育てんとて、其ものを傷ふ。」

と詞書きして、

竹の子を竹にせんとして竹の垣

と吟んだが、句よりも其の心境に時人を景仰せしめた。其の他にも人口に膾炙した句がいくらかも残つてゐる。殊に文章は凡を抽いて居つた。

來山は生れた咎で死ぬるなり

それで恨みも何もかもなし

斯ういふ振つた辭世を詠んで、享保元年十月三日、六十三歳を以て歿つた。遺骸

は逢坂山一心寺に葬つた。來山の草庵十萬堂の面影は、今だに其處に止めて居る。

長井家久、高橋文十、村井古道、井上布門などは皆な其の門人であつた。

池大雅

一 湖水に投じた自畫の扇子

大雅堂は京師に生れ、姓を池、諱無名(阿梨奈と唱ふ)、字は貸成、通稱秋平と呼ばんで居つた。實の果る樹花から知れる——大雅は幼ない時から衆童にすぐれて居つた。既に三歳位の時分から、大人を驚かすやうな能書であつた。五歳の年の一日黄蘗山にのほつて、千呆禪師に謁した時、席上で楷書を大書したが、其の筆勢の見事さには、禪師をはじめ衆僧呀つと感嘆の聲を放つたといふ。

大雅堂は能書の外に繪才があつて、何れかと云へば、幼時から繪の方が好きであつた。長ずるに及んで紀州に赴いて、祇南海に就いて繪を學んだ。南海は大雅堂の

非凡の才を愛し、清人肅尺木の畫譜を贈つて、

「子畫を學ばゞ、當に文人學士の畫を學ぶべし。」と言つた。

大雅堂の描いた繪が、時好を趁はず、清麗、高雅の趣があつたのは、其の時の訓諭を服膺したためである。

初め、彼は扇面に風景畫を描いて、自らそれを驚いで、美濃、尾張、近江と行脚をしたが、素より流行に逆ふた彼れの畫が、流行を遂ふ俗人の眼によるこばれやう筈がない。

「また持ち戻すのかな。」

彼は賣れない扇面の箱を負ふて、落膽して瀬田の橋にかかつた。

彼れの身につけた袷は、もう古びて埃にまみれ、衿垢は光つてゐた。穿いてゐた

冷飯草履は摺り切れ、足は一步も進めないほどに疲れて居た。旅疲れのした顔、それは日に憔悴して、髯は蓬々と伸びて、見る影もなく寝れてゐた。

「ああ……。」

橋の欄干に凭れて、深い溜息を洩らした。そして、負ふて居た筐をおろして、それを欄干の上で蓋をとり、中から扇面を一本づゝ取り出しては、穴のあくほど自分の描いた繪を凝視めて居た。

斯うして一本宛見終つて、空を見上げた時、もう暮色は迫つて、鴉は時に急ぐのだつた。うそ寒い風は、遠慮もなく彼れの衿元に吹き込んだ。

「持つてあるいても賣れぬ繪ぢや……。」

さう言つて、叮嚀に扇面を筐に納めて蓋をしたが、屹と決心した面色で、

「賣れぬ畫ぢや。買ひ人のない扇子ぢや。持つてゐても荷になるばかり、龍神に供へよう。」と言ふかと思ふと、筐は洵然と漫々たる湖水の波に落ちた。それを見定めた大雅堂の面には微笑が浮かんだ。けれどもそれは淋しい、傷まし氣の微笑であつた。

彼は斯うして、丹精して描いた扇子を湖水に投げ、龍王を祭つてからは、不思議にも彼れの非凡の技は世に知られるところとなつた。後大和に遊んで、柳澤里恭に設色の法を聞き、また土佐光芳に就いて我國の畫法を學んだ。其の當時の畫家にあつては、漢法を學ぶものなどは絶無であつたが、彼は同好の望月玉蟾と約して、大いに之れを唱へ、乃ち倪雲林の畫法を模し、又清人伊孚九の筆致に倣ふて、山水、人物、花鳥、孰れも其の秘奥を窮めたが、決してそれに拘泥することなく、先人の

風を模倣することばかりを、屑としなかつた彼は、和漢の長所を取り、それを調和して、加ふるに彼の天才を以てし、何人も追従を許さぬ一家の風を興した。大雅堂の名は世に響いても、極めて寡慾な彼の事であるから、貧乏は常住であつた。

或る時であつた。とある書林で石彫の十三經を見つけ出して、それが欲しくて堪らなかつた。けれども先立つものは金、此の時ばかりはつくづく金の無いことを不自由に思つた。そして貯蓄の必要を感じたので、微を積み、細をあまして、あたかも蟻が食物を集めるやうにして漸く錢百貫を貯へ、早速件の書林へ行つて購めやうとしたが、早くも彼の足許を見た書林の主人は、飛んでもない高値を吹つかけたので、折角の彼の望みも忽ちヘシ折られてしまつた。

「仕方がない。」

斯う腹の裡に思ひながら書林を出た。それでも十三經の畫いてある方をちよつと振りかへつて見た。そして、彼は其の足で直ぐに祇園の社に詣で、十三經を購ひたさに貯へた金を取り出して、

「これだけの金を貯めるには容易なことではなかつた。それでも望みの品が手に入らなければ、もう自分に此の金は要らない。」と言つて、惜し氣もなく残らず社に献じた。

二 書を書きかけて花見

大雅堂の居室には、古ぼけた青い毛氈が敷きつめられて、其の居周圍には、書き棄てた書畫の反古紙や、紙屑やら、埃やらが堆かく積まれてゐた。そして、曾て門

を閉して寝た事がなかつた。

ところが或る夜の事であつた。大雅堂は夜半に偶と眼を覺した。すると誰やら人の氣配がするので、見ると一人の賊が忍び込んで、今しも目星しいものを盗み去るべく荷造の最中であつたか、大雅堂が眼を覺したのを見て、大いに驚いて、逃け出さうとするので、

「何うせ碌なものはないが、それでもまあ金目になるものが、此方にくらか残つてゐる。そんな反古紙だけは、お前の方では何の役にも立つまい。ところが俺の方では、これだけが身上ぢやから残して置いて、お前の役に立つやうなものばかり持つて行つて呉れ。」と言つたので、追がの盜賊も煙に巻かれて、一物も持たずに、コソ〜と逃げ去つた。

彼は常に山を好んで、高山絶嶺を跋涉するのを何よりの楽しみとしてゐた。分けでも富士へ登ることが好きで、幾回となく登山したが、當時の富士登山は、今日の様に容易なものではなかつたが、それでも彼は登山のたびに路を變へたが、やがてはそれが「富士一百圖」となつたが、何れも奇狀變態、それぞれ趣を異にして居たのには、何人と雖も驚嘆せずには居られなかつた。

彼は後、三岳道人と自ら稱してゐたが、それは富士、白山、立山に登つて、親しく其の奇景風光を交めたからであつた。

大雅堂が祇園のほとりに住んで居る時の事であつた。ある時急に大阪行きを思ひ立つて、ぶらりと家を出て、ちやうど建仁寺の前邊りまで來た時、

「もし〜。」と不意に後から呼ぶ女の聲がした。

自分かしらと思つて振り返つたところへ、額の汗を拭きながら、黙つて一束の筆を差し出した。粗忽かしい彼は、

「これはく、何處の御婦人が存じませぬが、よく拾つて下された。御親切に忝ない。」と言つて、幾度となく押しただいて、すたく歩いて行つた。

筆は落したのではなく、初めから家に忘れて来た。それを後で氣がついた妻の町子が、夫の跡を追ふて届けに来たのだつた。けれども彼は、途中で落したものを、知らぬ何處かの婦人が拾つて呉れたものだと思つてゐた。妻の町子の方でも、夫の此の無頓着を見ると、

「どう致しまして。」と言つて家に歸つたが、追かに崎人の妻、似たもの夫婦とはよく言つたものだ。

「大雅堂が来た。」と云つて、大阪では何れも彼に對して禮を厚うした。そして八方から引張風のやうに招待された。其のうち大和屋某といふ豪商があつて、町人ではあるが彼の名を慕ふて、店の暖簾を是非とも書いていただきたいといふ事であつた。勿論無難作な彼の事であるから、快くそれを承諾して、早速筆を携へて其の家へ行つた。

某の家では、下へも置かぬ待遇であつたが、彼はそれを悉く辭退して、直ぐに揮毫の準備をさせた。

「さて、どう書きますかな。」と彼が問くと、主人は恐る／＼、

「甚だ何でございしますが、どうか大和屋と書いて頂きたう存じます。」

「大和屋か……よろしいつ。」

彼はたつぷりと筆に墨をふくませると、あたかも龍蛇の躍るが如く、「大和」と書いた。主人をはじめ家人は、其の筆勢の巧みなのに、片唾を呑んで、あとの「屋」の一字が出来るのを待った。

すると大雅堂は、何を思ひ出したのか、急に筆を棄てて立ち上った。

「先生、どうかなさいましたか。」

主人は心配氣に訊いた。

「いや、少し……。」といふかと思ふと、ふいと座敷を出て行つたが、其のまゝ表へ姿を消して了つた。

何しろ「大和屋」の「大和」といふ二字は出来るのに、あとの一字が出来ないうちに、「いや少し」と言つたまゝ出て行つたので、大騒ぎとなつた、八方へ人をやつ

て探さしたが、大雅堂の姿は何處にも見えなかつた。それがために、大雅堂先生は神匿しに遭つたといふ風評がぱつと立つた。其の風評がそれからそれへと傳へられてゐる五日目、けろりとした顔をして、大和屋の暖簾を潜つた。

「おや、先生何處へ行つてらつしやいました。先生が神匿したに遭ひなすつたといふて、えらい評判で……。」は、俺が神匿しに……面白いな。何、大和と書いて見ると、不圖吉野の事が心の中に浮んだのぢや。一目千本が今頃は満開ぢやらうと思ふと、矢も楯もたまらなくなつたので、一寸花見に行つて來たので。だが、幸ひと花の盛りの間に合つてよかつた。」と澄してゐたのには、大和屋某をはじめ、其の家人ば開いた口がふさがらなかつた。

大雅堂は、改めて墨を磨らせ、美事に残つた「屋」の字を大書した。

三 大雅堂の畸行

或る時、大雅堂は近江の高崎候に所望されて障子を畫いた。そして京に歸つてから其の報酬を賜はつた。其の時高崎候の家來は禮服を着けて御禮を申されるやうと言つた。

「畏まりました。」

彼は諾がつて、高崎まで袴を着ながら行つた。

それからまた、大雅堂が江戸に下つた時の事、某候の邸に知己があつたので、其處へしばらく足を留めた。恰度六月の暑さの盛りであつたが、彼は偶と故郷の祇園の社に御興洗ひの神事が催ふされる當日となると、しきりに里戀しくなつたので、せめては其の眞似事でもしてと思つた彼は、紙で以て人形をこしらへ、萬燈を點し

て囃し立て、

「祇園祭りぢや、祇園祭りぢや。」と囃し立て、邸の中を廻りはじめた。

すると藩候の世子がそれを聞いて、

「予も見ます。此處へ持て。」と臣に命じて、其の趣きを傳へさせた。

大雅堂は、囃しに紛れて、故意と聞えぬ風をして、其處らを押し廻つた。

世子は氣をいらだて、幾度となく催促せしめた。大雅堂も詮方なく、

「只今參らうとする處でござる。」と言ひながら、故意と持つてゐた萬燈の火で、紙人形を粗忽に焼いたやうに見せて灰にして了つた。それを見て臣のものは蒼くなつた。

「いや、これは粗忽……。」と言つて「實はこれは祇園の社へ奉納のつもりに作りま

したものの、灰になりましたところを見ると、人に見せたくないとの神慮しんりよかも判りませぬで、はゝゝゝ、御前ごぜんよしなに。」と、空くらとほけた顔かまをして言つた。

「不埒ふちな奴やつぢや……。」といふので、彼は直ただちに追おひ拂はらはれた。

それから彼は奥州おくしゅう地ぢを廻まはつて京都きやうとに戻もどつたが、奥州おくしゅうの某寺なにがしじに残のこした彼の一偈いっけを見てそれを慕したふて三百餘里よひの道程みちを遠とほしともせず、はるばる京都きやうとまで彼かれを尋たづねて来た崎き僧そうさんさへあつた。

彼かれが如何いかに權門けんもんに媚こふることが嫌きらいだつたかといふ事は、前の祇園祭ぎんまゐりの眞似まね事ごとで、紙人形かみだんぎやうを焼やき棄すてた一事じでもよく知る事ことが出来できる。其その代かはりに、下しもに對たいしては涙なみだの出でるほどの親切しんせつがあつた。

或ある時とき、ある書林しゆりんの僕しゆべが、遊興費いゆうきやうひに困こまつて、主人あるじの金かねを費つかひ込んで放逐はうしやくされたの

で、大雅堂たいがたうの許もとへ暇乞いとまごいに來た。大雅堂たいがたうは非常ひじやうに同情どうじやうした、

「心配しんぱいするな。他國たこくへ行いつて苦勞くろうをするよりも、慣なれた主人あるじの處ところへ歸かへれ、俺わしが詫わびをしてやる。」と言いつて、自分じぶんの所持しよじしてゐる、書畫しよくわ或あるひは調度てうどの類るいを賣うり拂はらつて金をこしらへ、其その金かねで僕しもべが費つかひ込んだ主人あるじの金かねを償つぐなふて、主人あるじに詫わびをしてやつと歸參きさんせしめた。

又また、ある時とき、さる富豪ふがうから書あを頼たのまれたが、久ひさしい間約あひだやくを果はたさなかつたので、幾いく度どとなく使つかひが來きても「近日きんじつのうちに」と言いつて歸かへしくした。

一日あるひまた童僕こどもがやつて來たが、まだ出來できてゐなかつたので、流石さすがの童僕こどもも幾度いくどとなく空使からづかひとなつたのを憤いつて、

「まさか死しんでゐるんぢやあるまいし、なまけものかうぬ惚ぼれか知しらないが、斯かうし

て使ひに来る者の身にもなつて見るが可い。」と罵りながら門を出た。

それを聞いた彼は、急に走り出で童僕を呼びとめ、

「いや、自分が過つて居つた。」と言つて、直ちに筆を執つて書いて與へた。

大雅堂は、かうした清貧に安んじて、錆びた咽喉に古曲をうたつて樂しみ、妻の

町子は筑紫琴を弾じて、夫の咽喉に合せるといふ風にして、樂しい家庭を作つてゐ

たが、安永五年四月十三日、大雅堂は病を得て眞葛原の草堂に歿つたが、病の床に

伏してからは、「今度は駄日ぢや」と自ら觀念して、勧められても決して醫藥を口に

しなかつた。行年五十四歳、舟岡の南、淨光寺先人の墓側に葬り、墓誌は大典禪師

が物し石に刻むだ。

惠恩院六如大僧都圖像贊並小引

丈人 以二書 畫一著二名 海 内。余向以二室 邇、屢相 往來、略知二其人。蓋藻レ眞

耦 俗 隱 二千小伎一者也。頃有レ人、齋 其遺像、求 題 一 辭 一 余私飲二高

風 一、不 揣 二蕪陋、輒 爲 賦 二長句、字 々 實 錄。不 敢 文 飾。丈 人 有 知、應 撫 二

掌 於 無 何 有 之 鄉 一 矣。

鶉衣蓬髮意怡然。言語近禪形肖山。避世仍懷濟世志。賣山不著

買山錢。穠村滿屋纔容膝。川字或陸時弄絃。至竟深心誰可會。

空令下姓字藝中傳上。

大雅の妻町子

一 冷泉院殿で貰つた赤前垂

大雅堂の妻町子は、祇園林百合子の娘であつたが、大雅堂の條でも記した様に、彼女も亦奇人であつた。玉蘭と號し、夫に習ふてなかく、畫は巧みであつた。玉蘭の號は、柳里恭の號の玉桂の一字を貰ふたのであつたが、夫大雅と共に、冷泉院に招かれて歌道を學んだ。

何しろ茶店の娘が歌を詠むといふ、それだけでも評判であつた。けれども彼女の母の百合子も其の道のたしなみがあつたので、其の血をうけた彼女が、歌道に興味を有つたとて決して不思議ではなかつた。

彼女がはじめて冷泉院へ夫と共に参邸した時は、御内の女房たちは、其の名海内に響いた大雅堂の妻、畫も歌も能くするといふ玉蘭、それはどんなにみやびな女かと、何れも争ふて垣間見ようとしたが、豈圖らんや、大雅堂が伴つて門を潜つた女は、糊の硬い木綿衣物を着て、手には魚の籠を提げて居つた。

「大原女のわらうづはかぬやうぢや。」と言つて、女房たちはクス／＼笑つた。

けれども玉蘭は平氣であつた。夫は名だたる畫家、而かも招かれて邸へあがつたのであるから、唯だ一通りの禮儀で事足るのだが、無頓着のやうでも、物堅い玉蘭は、苟しくも物の師とたのむ人の許へ、はじめての目見得であるからとて、季節の謝物をととのへて行つたのだつた。

卿は其の景迹を悦んで、

「歌はすべてその心を以て基とする、そなたの歌もその氣性に合ふ様に、添削してとらすであらう。」と仰せられた。

彼女は初めて目通りに、斯うした面目を施して歸つたが、其の後も屢々詠草を携へて卿の門を潜つた。

ある時卿は、眞面目顔して御前へ出た玉蘭は、戯れ半分に赤前垂を引出物にした。彼女はそれを忝けなく頂戴して歸つて、春の名残の茶店へ、娘のやうな顔をして、自慢に示めて出た事もあつた。

夫大雅に先立たれた彼女は、清く淋しい孤獨の餘生を送つて居たが、夫が歿つて九年目、即ち天明四年九月に一生を終つた。

廣瀬 惟然

一 女の小袖を著て遊ぶ

惟然是美濃國關の豪家で、姓を廣瀬と云ひ、其の性質風流を好み、芭蕉の門人となつて、なか／＼感吟も多かつた。

親から譲られた莫大な財も、もとより風流を好むほどの惟然には、後生大事と思もつてゐる事は出来なかつた。一代のうちに費やしてしまつたが、師の芭蕉が死んでからは、

「ああ、師匠に歿なられては、最早や廣い世の中に、師とたのむ者はない。談ずるに足るものもない。」と、惟然是非常に悲觀した。

惟然みねんは曾かつて芭蕉はせうと共に旅たびをした事ことがあつた。けれども其その頃の惟然みねんには、木質きしつ宿しゆくの穢たじろいのは勿論もちろん、泊とまり泊とまりの木枕きまくらさへも痛いたくて眠ねむれない位くらゐであつた。それで或ある時とき木枕きまくらに帯おびをぐる／＼巻まきつけて枕まくらしたのを見た芭蕉はせうが、

「はゞゞゞゞその頭たまの奢おごりで家いえを失うしなふたのか。」と言いつて笑わらつた事こともあつた。尤もつと其その頃の惟然みねんは、親譲おやゆづりの財さいは勿論もちろん、住すむ家いえさへも失うしなつて了しまつてゐた。

惟然みねんは久ひさし振ぶりに故郷こきやうに戻もどつた。そして舊交きうかうの厚あつかつた篠田某しのだながしの家いえに數日間すうじつかんかうりう逗留たうりうした。篠田某しのだながしは、惟然みねんの境遇きやうぐうを氣きの毒どくに思おもひ、親切しんせつに之これをもてなした。すると或ある日ひ、惟然みねんは風呂ふろが沸わいたといふ案内あんないで、湯殿ゆどのに入はいつて行いつた。偶あと次つぎの室まを見みると、其處そこには女をんなの小袖こそでが脱ぬぎ棄すててあつた。

「ふゞ……。」と微笑ほくそむだ惟然みねんは、ふら／＼と湯ゆからあがつて、其その小袖こそでを身みに纏まとふ

たまゝ、何處どこともなく出でて行いつて了しまつた。

惟然みねんが風呂ふろに行いつたまゝ、なか／＼あがつて來こないので、主人おなじは心配しんぱいをして見みに行いつて見みると、惟然みねんの着物きものは脱ぬぎ棄すてゝあるが、姿すがたは見みえず、次つぎの室まにあつた小袖こそでが見みえなかつた。

「はて、惟然みねんどのはどうなされた。此この頃ころどうも變へんぢやと思おもふて居ゐたが、扱さては風ふう狂きやうなされたのではないか。」と、心配しんぱいをして、近所きんじよに人ひとを遣つかはして探さがしたが、遂つひに其その姿すがたは見み出し得えなかつた。

惟然みねんは果はたして風狂ふうきやうしたのだつた。女をんなの小袖こそでを著きて、五里ごりほどはなれた處ところに行いつて、たはいもなく過あそんで居ゐるといふことを耳みみにしたので、篠田某しのだながしは態々わざわざ出でかけて行いつて、惟然みねんを連つれて來きたが、ちつとも落おち着きいてゐなかつた。

二 ゆくりなく娘と邂逅

「先づたのむく、椎の木もあり夏木立、音はあれか檜木笠、なむあみだく。」
ほろくに破れた著物、破れた笠、和讃の念佛を唱へながら、瓢箪を叩いて名古屋の町をうろつく坊主があつた。

「やあ、乞食坊主だく。」「なに、狂人ぢやく。」と、女子供も道ゆく人も、其の變つた風を見て噓し立てるのだつた。

「は………乞食坊主？ 狂人？ うむ面白い面白い。だが、俺は乞食でもなければ狂人でもない。天狗ぢやく………音はあれか檜木笠、なむあみだく。」

取り圍む女子供を、とらんこの眼で見やりながら、瓢箪を叩いて拍子を取りながら歩いて行く。此の坊主こそ、彼の風狂した惟然だつた。

「先づたのむく、椎の木もあり夏木立、音はあれか檜木笠、なむあみだく。」
惟然はふらくくと、とある曲り角を曲らうとした。

此の時彼方から、大家の寮人らしい若い美しい婦人が、下僕と女中を随へて來たが、惟然の姿を見ると、ハツとして立ち停つた。惟然は其の婦人の姿をちよつと見ると、道を變へて、

「音はあれか檜木笠、なむあみだく。」
瓢箪を叩いて行つた。

「お父様……。」

若い婦人は、下僕と女中を棄て、惟然の跡を逐ふて、いきなり其の破れた著物の袖に縋つて面を見上げた。

「誰ぢや。」

惟然(みねん)はじつと婦人(ふじん)を見おろした。

「あれ、お父様(とうさん)、ま見忘れ遊ばしたか、私(わたくし)はあなたの娘(むすめ)ではござりませぬか。」

「お、娘(むすめ)か……。」

「お父様(とうさん)、お懐(なつ)かしうございます。」
 雨風(あめかぜ)に、案山子(あがし)の様に窺(うかが)れた惟然(みねん)の面影(おもかげ)を見て、娘(むすめ)はよよとばかり泣いた。漸(やう)やく近づいた供(とも)のものも、道往(みちゆ)く人々(ひと々)も立ち停(とま)つて憫(あはれ)れた顔(かほ)をして見てゐた。けれども娘(むすめ)は、親(おや)ぢやもの、何(なん)の恥(はぢ)も外聞(ぐわいぶん)もあらうぞ。

惟然(みねん)が一人娘(ひとりむすめ)を縁(えん)づかしたのは、まだ世(よ)に時(とき)めいてゐる時(とき)であつた。嫁(か)づけた先(さき)きは名古屋(なごや)の豪家(ごうか)だつた。けれども風狂(ふうきやう)して出(で)てからは、もう音信(いんしん)不通(ふつう)に過(お)したの

が幾年(いくわし)はからずも此處(こゝ)で邂逅(かいこう)ふたのだつた。

惟然(みねん)が遁世(とんせい)したのは、前(まへ)にも述べた様に、師(し)の芭蕉(ばせう)に死(し)なれて、世(よ)にたのむものも、談(だん)ずるものも無いといふ念(ねん)が深(ふか)かつたが、或時(あるとき)庭前(ていぜん)の梅花(ばいけ)が、鳥(とり)の羽風(よくぜ)にヒラ／＼と散(ち)つたのを見てであつた。あとに遺(つ)された妻(つま)は、娘(むすめ)の家(うち)に引(ひ)き取(と)られて残(のみ)つた。

娘(むすめ)は涙(なみだ)ながらに、一別(いつべつ)一來(いちらい)の物語(ものがたり)をした。それを聞(き)いては、遺(つ)がに世(よ)を棄(す)てた惟然(みねん)にも涙(なみだ)を催(もよほ)さすにはゐられなかつた。

「兩袖(りやうそう)にただ何(なん)となく時雨(ときぐれ)かな」

惟然(みねん)はかう口吟(くちぎん)んで、反(そむ)けてゐる兩眼(りやうがん)を逋嗒(しほた)きながら、娘(むすめ)をそつと押(お)しやつて行(い)かうとした。